
咸宜園教育研究センター 研究紀要

第 1 号

私塾咸宜園と天領日田の町—その共生の諸相と関連遺産

後 藤 宗 俊

咸宜園教育研究センター年報（平成22年度）

咸宜園教育研究センター要覧

日田市教育委員会
2012.3

咸宜園教育研究センター

研究紀要

第一号

二〇一二年三月



咸宜園教育研究センター



史跡咸宜園跡（写真は秋風庵）



開館記念セレモニー（咸宜小学校・桂林小学校の児童）



咸宜園門下生子孫の集い（重要文化財 長福寺本堂）

ごあいさつ

このたび咸宜園教育研究センター研究紀要を発行する運びとなりました。

当センターは、咸宜園や日田市の偉大な先哲であります廣瀬淡窓先生とその門下生などについての調査研究や資料の公開、展示を行うことで、その理解を深めていただき教育、学術や文化の向上を図ることを目的に、国史跡 咸宜園跡の隣接地に、平成二二年一〇月に開館いたしました。

さて、大分県日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置し、福岡県と熊本県に隣接する地域です。また、周囲を阿蘇、くじゅうや英彦山山系の美しい山々に囲まれ、これらの山々から流れる豊富な水が日田市で合流し、山紫水明の地としても知られています。さらには、古くから北部九州各地を結ぶ交通の要衝として、江戸時代には幕府直轄地（天領）として西国筋郡代が置かれ、九州の政治・経済・文化の中心地として栄え、豆田町には当時の歴史的な町並みが残され、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

この豆田町の豪商廣瀬家の長男として生まれた廣瀬淡窓は、家督を弟・久兵衛に譲り、自らは学問教授の道に進み、文化二年（一八〇五）長福寺学寮を借りて開塾し、その後「成章舎」、「桂林園」を経て、文化一四年（一八一七）淡窓先生三六歳のときに、現在の地に塾を構え「咸宜園」と呼びました。「咸宜」とは、「ことごとくよろしい」という意味で、『詩経』からとった言葉で、入門時に身分・年齢・学歴を問わない「三尊法」、それぞれの学力に基づいて等級別に評価した「月旦評」、門下生に塾の運営に関わる役割を与えて社会性を身につけさせる「職任制」などの独自の教育手法が評判となり、全国から多くの門下生が集まりました。

淡窓先生は、その当時の様子を次のように詠っています。

幾人負笈自西東	幾人か笈を負ひて西東自りす
両筑双肥前後豊	両筑 双肥 前後の豊
花影満簾春昼永	花影 簾に満ちて春昼永く
書声断続響房櫓	書声 断続して 房櫓に響く

このように多くの門下生が咸宜園で学び、その数は、入門簿に残る門下生の数に日記等で名前が確認される者を加えると五〇〇〇名を超え、江戸時代の私塾としては、最大の規模を誇っていました。

病弱であった淡窓先生が、半世紀にわたり門下生にかけた情熱と努力は、私も教育に関わる者の鑑であり、その偉業を永く後世に伝えることで、市民が故郷日田市を愛する心を育むよう努めてまいりたいと思います。

最後に、この研究紀要など当センターでの調査研究の成果が、咸宜園教育と淡窓先生やその門下生に関係する方々の研究資料の一助になることを期待してご挨拶いたします。

目次

口 絵

ごあいさつ

日田市教育長 合原 多賀雄

私塾咸宜園と天領日田の町―その共生の諸相と関連遺産

咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊

咸宜園教育研究センター年報（平成二十二年度）

I. 教育普及事業（展示事業・講座・講演会・イベント等）..... 1

II. 史料収集事業（寄贈史料・寄託史料・寄贈図書・咸宜園関係参考文献）..... 6

III. 世界文化遺産登録推進の取組み..... 13

IV. 利用状況・日誌抄..... 15

V. 各種委員会委員・職員名簿..... 16

咸宜園教育研究センター要覧

I. 沿革..... 17

II. 施設の概要・組織..... 18

III. 利用案内..... 19

IV. 条例・規則..... 21

私塾咸宜園と天領日田の町——その共生の諸相と関連遺産

後藤 宗俊

はじめに

周知のように、日田市では今、咸宜園を世界遺産にという取組みが進んでいる。茨城県水戸市の弘道館と偕楽園、栃木県足利市の足利学校、岡山県備前市の閑谷学校に咸宜園を加えて、「近世日本の学校遺産群（仮称）」（以下「近世学校遺産群」として登録をめざそうというものである。

江戸時代の日本は、当時のヨーロッパ諸国と比べても高い教育環境を保っていた。この近世教育の水準の高さが、明治以降の日本の、ある意味で世界的にも稀有な近代化の歴史の、その基調を支えたといえるのである。その学問・教育を支えたのが各地に作られた藩校・郷校（学）・私塾・寺子屋などであった。中でも教育の質の高さと広がりということでいえば、私塾の存在が大きかった。R・ルビンジャーは私塾の「個性豊かで、斬新かつ進歩的な学習コース」こそが、明治維新の改革を担う「人材のプール」となったと指摘している。（私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー）

要するにこのたびの取組みは、世界史的視点で日本の近世教育をみなおす。そういう目標をかかげているのである。

目下、こうした視点で登録申請に向けて、そのコンセプトとストーリーの策定が進められているところである。そうした中で様々な活動が進められている、直接的に業務を担当する行政機関相互の連絡協議はもとより、それぞれの構成資産をめぐる学術シンポジウムや合同学術会議などが開催され成果をあげている。平

成二三年一〇月には足利市で『近世の教育資産』世界遺産シンポジウムin足利が開催された。筆者は、そのパネリストとして参加したが、その折り、広瀬旭荘が天保一四年（一八四三）に足利学校を訪れ、蔵書の書誌や内容について精査した際の仔細を教示していただくなど思いがけない成果を得た。

日田市では平成二三年十一月に「私塾フォーラム」が開催され、並行して咸宜園教育研究センターにおいて特別展「近世の私塾―西日本を中心として」を開催した。さらに平成二四年二月には「咸宜園を世界遺産に、ふるさと日田を歴史的風致都市に」というテーマを掲げた『第一回 日田広域文化・観光フォーラム』（広域文化・観光フォーラム実行委員会）が開催されるなど、数多くの事業が展開されている。

こうした経緯をふまえながら、以下「近世学校遺産群」について、いくらかの私見を述べ、あわせて、論議されつつあるコンセプトをふまえながら、具体的に咸宜園とその関連遺産群について所見を述べたい。

一 「近世学校遺産群」と咸宜園

「近世学校遺産群」の取組みでは、前述のように日本の近代化の前提としての近世教育の見直しという方向性が共有されている。去る平成二四年一月一四日（土）と二月一〇日（金）には東京有楽町の国際フォーラムにおいて「関係自治

体による合同学術会議」が開催され、関連するテーマをめぐって多面的な論議が行われた。この中で、いわゆる鎖国体制の中で、日本は中国や韓国と違い、独自の自由な視点で「儒学」をとりいれたこと、また海原徹氏が「私教育」の原風景と呼んだ江戸の私塾の「教える自由と学ぶ自由」についての論議は特に興味深いものであった。

この会議の中では、さらに新しい問題意識が提起されている。それは、これまでどおり、近世の教育を日本の近代化の準備という視点で捉えることはそれとして、今一つ、江戸の教育をとおして、むしろ日本の近代ないし現代（の教育）が失ったものを見つめなおすという視点が提起されたことである。そこには江戸の教育に近代・現代の教育を相対化する意義を見出そうという問題意識が込められている。

こうした議論の中で、筆者はあらためて思いを新たにしていることがある。それは学問と教育における中央と地方（地域）という問題である。例えば、一九八〇年代ごろからであろうか、わが国では、しきりに「地方の時代」がいわれ、それはその後の大きな時代潮流となった。

筆者は先年、文化財保護に関する論集「地域の歴史と文化遺産」を上梓したが、この論集の主題はまさに「地方」「地域」からの視点であった。「地域」に拠りながら「地域」を越える位相に達した歴史の実相を探ることが、筆者の生涯の主題であった。そして今、私は、ならぬ私の郷里日田市において、そのような事例の途方もない大きな先達に出会っている。それが他ならぬ広瀬淡窓と、その私塾咸宜園であった。

しかし、その後、淡窓・咸宜園について、いくらか学ぶうちに、右の問題意識の立て直しを迫られているという思いが深くなった。今日、われわれが言う「地方」とは、実は巨大にそびえる「中央」に対しての「地方」である。それは特に教育の場においてしかりである。筆者自身が永く奉職してきた別府大学もまさに「地方の大学」であるが、今日の地方の大学は、常に「中央」の大学等を意識しながら、「地方」の大学としての地歩の確立をめざして、さまざま取り組んでいくのである。

ここで地方の教育機関といえは、咸宜園はまさに地方の学園の代表といえるものである。しかし、淡窓自身には（今日の我々がそうであるように）「中央」を意識し、これに対峙して「地方」に教育の牙城を築こうというような姿勢は全くといっていいほど見られない。咸宜園はたしかに、当時の中央（江戸や京都・大阪）からすれば、究極の「地方」にあつたが、淡窓には、そもそもこれを「地方」としては認識していた形跡がないのである。それはひとり咸宜園だけのことではないかも知れない。

ことは淡窓のような、教える側の思想と実践の問題だけではない。全国の各地から咸宜園を目指して入門してきた若者たちにも、中央か地方かという選択は第一義のことではなかった。江戸の塾に入塾が困難であつたから地方のそれへという、今日ありがちな選択など無縁のことだつたはずである。してみれば、少なくとも「私教育」に関するかぎり、江戸時代には今日のような「中央」は存在していなかったというべきであろう。

ここで問題は徳川幕府の（私）教育行政の在り方の問題に及ぶであろう。そもそも、この時代、幕府には、特に私教育の位相では「教育行政」の枠組みなど、そもそも存在しなかった。あつても脆弱なものであつたことは多くの研究者が指摘しているところである。

こうしてみると、江戸時代における私塾の問題、とりわけ淡窓・咸宜園の問題は、「地域」あるいは「地方」の社会や文化を云う場合の、本源的な原風景を問うことにあるといえるのではないか。梅原氏が指摘した「教える自由・学ぶ自由」ということも、ここにかかわっている。

こうした議論のなかで、委員の間では、現在取り組んでいる「近世学校遺産群」の問題をつきつめて行けば、いわゆる江戸時代の「鎖国」体制下の文化論全体の問題に及ぶのではないかという意見も交わされた。周知のように、とかく「鎖国」体制については、とりわけ文化の発展の上でマイナス思考で捉えられがちである。しかし、その実、むしろ鎖国体制の下であつたからこそ、世界に比類のない文化を生む土壌ができ、かつ多くの花実が得られていた。そのことは特に芸術・文化

の領域では早くから指摘されていることである。

評論家加藤周一は、名著『日本文化における時間と空間』（二〇〇七 岩波書店）の中で江戸時代の絵画芸術にふれて次のように述べている。

「鎖国の時代、日本の代表的な画家たちが一步も国外へ出なかった時にも、彼らの仕事（主として木版画）の西洋への影響は大きかった。逆に開国の時代、いわゆる「近代日本」では、国際的評価の高さにおいて、徳川時代の木版画に匹敵する作品があらわれなかった。少なくとも絵画に関するかぎり、鎖国は文化の国際化を、開国は文化の地域的閉鎖性を、喚起したようにみえる。」

加藤がここで意識していた画家とは、木版画家、つまり歌川広重や葛飾北斎であるが、加藤の視野の中では、さらに遡って俵屋宗達、尾形光琳・乾山、伊藤若冲らが見えていることは明らかである。加藤は「鎖国は文化の国際化を、開国は文化の地域的閉鎖性を喚起した」所以について

「けだし芸術的創造性は、自国あるいは故郷の文化があたえる条件の特殊性を徹底的に追求した極限において、芸術の普遍性へ向ってつき抜ける（のり越える）運動によってのみ成立するものだからであろう。」

と述べている。この指摘も十分に理解できるところである。加藤がここでいう「芸術」を「学問・教育」に置き換えてみれば、これはほかならぬ「日田の咸宜園」に通ずる問題のように思われる。

二 咸宜園と関連遺産群の調査と保護

さてここで、「近世学校遺産群」のひとつとしての「咸宜園」関連遺産群の調査と保護の問題にすすもう。

前述のような一連の取組の中で、咸宜園をめぐる研究と保護の取組みは、新たなステージにたつこととなった。現在、日田市教育委員会によって史跡咸宜園跡の保存と整備が計画的に進められている。また「咸宜園教育研究センター」では、

咸宜園関連遺産の調査・研究と普及・啓発事業が進められている。

こうした中で、「咸宜園」をどう捉え、調査・研究し、保護してゆくか。

ここであらためて咸宜園の教育の特色について見てみよう。筆者は、既往の学史的な研究成果をふまえて、次のようにその特色を整理している。

- ① 「三尊の法」と「月旦評」に象徴される平等主義と実力主義の教育。
- ② 「遊山」「放學」に見られる日田の自然と旧跡に遊び、詠み、学ぶ教育。
- ③ 「咸宜園」と日田の町の共生——多くの留學生が学ぶ「学園」都市の形成。
- ④ そして何より知性（学問）と感性と情愛と・三位一体の人としての窓窓の人間像。

等々である。

筆者がここで特に注目したいのは、②と③である。これまで度々指摘したところであるが、咸宜園跡を中心に日田の町と山水を俯瞰すると、咸宜園から北は永山布政所跡と永山城（月隈山）まで、東は慈眼山や大原八幡宮まで、そして南は限の町や亀山の森まで。これらすべて咸宜園からほぼ一キロの内にあるのである。要するに咸宜園から四方ほぼ一キロ、歩いて一五〇分ほどのところに、すべてが収まるのである。この半径一キロの円を東京（江戸）で見ると、江戸城（皇居）の広さにすぎない。この何とも狭隘な盆地の空間に、幕府の役所、豆田と限の町、多くの城跡や神社・仏閣、そしてそれを包む美しい川と森がある。咸宜園の教育は、これらを自在に取り込み、これをいわば咸宜園の生きたキャンパスとした教育であった。当然、②の遊山と放學にかかわる遺産群と③の咸宜園と日田の町の共生という視点からの関連遺産の検討が必要となるが、②については後日に譲るとして、ここでは③の咸宜園と日田の町の共生という視点に絞って検討しておきたい。

咸宜園と日田の町の共生という認識は前記の「関係自治体による合同学術会議」で提案された「ストーリーとコンセプト」でもすでに組み込まれている。すなわち「近世学校遺産群」の構成資産として（一）水戸の弘道館、（二）倍楽園、（三）足利学校、（四）閑谷学校とともに、（五）咸宜園、（六）豆田町が併記された。

これまでの単体としての咸宜園から、咸宜園と豆田町ということになったのである。

そうであれば、当然のことながら咸宜園と日田の町、とりわけ豆田の町との「共生」のかたちが学術的に実証されていなければならない。その共生の紐帯となるものは経済・社会の様々な分野にわたるであろうが、「近世学校遺産群」という位相でいえば、まずは教育機関としての咸宜園と町のかかわりを見ていく必要がある。筆者はここで、ひとり豆田の町とのかかわりだけでなく、その北にあった永山布政所をあわせて取り上げる必要があると考えている。つまり永山布政所・豆田の町、咸宜園という組立が、言うところの共生の要件となるということである。

そういう視点に立って以下いくつかの問題を提起してみたい。

三 咸宜園と永山城・永山布政所

永山城の沿革：まずは永山布政所であるが、この布政所はもともと永山城から展開したものであるから、まずはその永山城を見ておきたい。

文禄二年（一五九三）、朝鮮の役の後、豊後国は太閤蔵入地となった。翌文禄三年、宮木長次郎が日田・玖珠二郡の郡代となり、日隈城を築城し、田島にあった町を城下に移し隈町とした。いわゆる隈町の始まりである。日隈城には慶長元年（一五九六）、毛利高政が入り天守閣を築いたが、翌年、高政は佐伯藩に転封、日隈城は佐伯藩の代官所となった。この年、小川沓岐守光氏が丸山城（永山城）を築き丸山町（豆田町）が成立した。その後、元和二年（一六一六）石川主殿頭忠総（譜代大名）が日田藩主となり、丸山城を永山城に、丸山町を豆田町と改めた。

寛永十六年（一六三九）日田の地は島原の乱を受け代官支配地となり、二人代官（小川藤左衛門・小川九左衛門）が着任、永山城前に布政所を設置した。これにより、近世城郭としての永山城はその使命を終えた。その後の永山城について

は正保年間「豊後国古城蹟并海路程」に「長山古城」とあり、「正保絵図」に永山城は廃城とある。その後、寛文五年（一六六五）日田騒動により代官の改易があり、熊本藩の預り地となり永山古城番が置かれた。現在に伝わる肥後殿堀は翌寛文六年に掘られたものである。

その後、永山城は廃城として経過するが、天和二年（一六八二）松平直矩が永山城に居城した。松平の支配は貞享三年（一六八六）、山形転封まで続いた。この間直矩は山上の城は不便であるため山麓に館を築くも完成を待たず転封となった。永山城改修後に小川藤左衛門が入り、一六八八年（貞享五）天領に復帰した。その後、明和四年（一七六七）、掛斐代官が西国筋郡代に昇格、日田は長崎代官と共に幕府の西国外様大名支配の最重要拠点となった。

この間、永山城古城については、代官によりさまざまな措置が取られている。寛政五年（一七九三）には郡代羽倉権九郎が伏見稲荷大明神を勧誘合祀した。これは代官専用の稲荷社として、一般の参拝はできなかった。また文化一五年（一八一八）、代官塩谷大四郎は月隈山（永山）に金比羅の祠を建てるため、山の一部を切り開き山道（永山道）修理した。この際、古墳時代の横穴墓が開口し人骨が出土したため、帰安碑を建てて供養した。この碑文が若き淡窓のよるの周知のとおりである。これらの工事は、他ならぬ布政所が、当該神社の勧請にあわせて、あるいはそういう大義の下で、城山の整備補修を行ったことかわつていよう。塩谷は、この「永山」でしばしば広瀬家の一家と咸宜園の淡窓師弟をもてなしている。

・文政八年（一八二五）

（二月）二十八日。塩谷明府ヨリ先考ヲ招イテ城山ニ於テ宴ヲ賜ハル。予夫妻、久兵衛、伸平、弥六、謙吉、伊織カ妻、久兵衛カ二女、伊織カ一子一女、皆随ツテ行ケリ。此時、山田惣平、藤屋七兵衛モ亦家族ヲ携ヘテ来会ス。府君自ラ其ノ座ニ臨ミ、宴終リテ後命シテ府内を觀セシメ玉ヘリ。

ここでは永山城について淡窓は「城山」と呼んでいる。この城山で塩谷は広瀬一族ほかを饗応したというのである。さらに

天保二年（一八三二）

・八月朔。謙吉ト官府ニ至リ、当日ノ賀ヲ申サントス。時刻尚早シ。諫山安民、相良元達ヲ伴ヒ、永山ニ登リ、暫ク道遙ジテ帰りシニ、礼謁ノコト已ニ終リタル後ナリ。期ニ後レタル罪ヲ謝シテ、家ニ屏居セント請ヒシカトモ、夫レニ及ハサルヨシ沙汰アリ。予、弱令ヨリ府中ニ出入リスリコト数十年、未タ曾テ此ノ如キ怠慢ノ行ヲナサス。コレ老イテ耄スルノ徴力。戒メズンバアルヘカラス。

ここでは淡窓は謙吉とともに官府に賀を申しに出向いたが、到着が早かったので、諫山安民らと「永山」を逍遙し、一刻して帰つたら礼謁の儀はすでに済んでいた。淡窓は、これは生涯の不覚であり、耄碌のはじまりかと述べているのである。この記事自体興味深い、ここでは「永山」が「逍遙」の場とし開放されていたことが示唆されている。同年九月十一日には、明府より塾生四十余人が招かれ永山に於いて、角抵（相撲）の戯を觀ている。このほか

・天保四年（一八三三）

（二月）二十日。府君命アリ。諸生ヲ大原ニ会シテ詩ヲ賦セシム。行厨ヲ賜フ。二十一日。又之ヲ永山ニ会シ、又厨ヲ賜ヘリ。

・天保十五年（弘化元）年（一八四四）

二月二日。橡園東遊。京撰ヲ経テ江戸ニ到ラントス。予、送ツテ永山ノ下ニ至ツテ別レタリ

などの記事も見える。

これらを通して、淡窓は永山古城について、これを「城山」といい「永山」というが、絶えてこれを永山（古城と呼んだ形跡はない。しかしそれはそれとして、永山城が、いわゆる廃墟の荒城となることはなく、今日という公園のように行き届いた手入れがなされていたことがうかがえる。この管理は、先の永山城の沿革に示すところ、布政所によってなされていたことは明らかであろう。あるいは、永山城は、布政所のすぐ背後にあり、歴史的にもその出自にかかわる城であるから、布政所にとって、いわば急場のときに備える逃げ城の意味合いを持っていた

のかもしれない。

永山城跡の発掘調査：ところで、ここに見る永山城跡については、これまで月隈公園の整備等にかかわつて、日田市教育委員会による発掘調査がおこなわれてきたが、平成二三年度、日田市教育委員会の委託を受けて、別府大学文化財研究所による発掘調査が行われた。調査は近い将来の史跡指定などを視野におき、城の全体の縄張りや遺構の遺存状況、さらには保護すべき石垣のカルテをつくるなどの目的で実施された。調査は二四年度以降も継続する予定であるが、その第一段階の今年度の調査は大きな成果を得ている。このうち山頂にある主郭部分の調査では、本丸御殿の礎石が検出された。ここでは同一規格の礎石五つが確認されている。また北側の堀手口の検出も確認された。特に注目されるのは、大手門虎口の石垣の調査である。これによりこの虎口の構造が明らかになるとともに、これが慶長期の石垣と推定された。石垣の南側も慶長期の所作と考えられている。

全体の縄張り図に関しては、堀外の構まで検討を加えるために、明治初頭の字



永山城遠景と本丸発掘状況

図の検討が同時に進められている。これらの調査の結果、石垣については三段階以上の変遷があったことが確認されている。今後、本丸縄張りの全体像の解明、慶長段階の石

垣の確認、複数回に渡る石垣の改修あるいは破城の痕跡の確認などの作業が行われる予定である。これらの成果と上記の永山城の沿革と対比して、それぞれの時代の遺構の全容の解明が待たれるところである。

この調査と並行して永山城内の石造物の調査が行われたが、このうち稻荷社境内には、文化一五年（一八一八）銘「盤水」がある。この年は、前述のように代官塩谷大四郎が月隈山（永山）に金比羅の祠を建てるため山道（永山道）修理した年である。

いずれにせよ永山城跡は城跡としての全容の解明を待つて、史跡等に指定する方向で作業がすすめられていくはずである。

一方、永山布政所跡の史跡としての全容の解明も愁眉の課題である。その場所については古絵図などにより、ほぼ特定されているが、なお精度の高い位置特定の作業が必要である。特にここには布政所の陣屋の図面「紙本西国筋郡代陣屋絵図」がある。これは文政四年（一八二一）から天保六年（一八三五）頃の日田陣屋見取り図である。その貼紙に「西国筋郡代塩谷大四郎正義御陣屋絵図面一葉 御掛屋京屋山田宗家所蔵」とある。当時の代官の私的・公的部分及びその周囲の諸役人の居宅、付属の施設などの配置がわかる。図面の間取りなどはほぼ正確に間尺をとっている。この絵図は陣屋跡の四至を固める上でも貴重な史料となるものである。榎原浩一氏は、この絵図によって陣屋の建物の復元図を提示している。現地は宅地化されているが、陣屋の遺構は残されている可能性が強く、史跡としても大きな可能性を秘めた所である。

咸宜園と官府の難：ここで咸宜園と永山布政所（官府）の関係を見ておこう。周知のように咸宜園は永山布政所の直近のところにあった。そういう場所で、三尊法や月旦評に象徴されるような教育が実践されていたのであるから、当然のことながら官府との間には多くの確執があった。特に文化一四年（一八一七）に赴任した代官塩谷大四郎は咸宜園の教育、とりわけ月旦評について、淡窓が「官府の難」といい、あるいは「家難」と呼んだような、執拗な圧迫と干渉を行った。そうし

た干渉が続く中で、天保五（一八三四）年五月、淡窓は塩谷に見せる表向きの月旦評とは別に、私的に「課程通考」と名付けた本当の月旦評を作った。淡窓はその理由として月旦評は君の命によって公平を失い、勤惰が位を変へ、利愚ところを転じるに至ったからだといっている。しかし所詮、私塾の試みなどは、県府の公に勝つことを得ず、徒に心を勞したとも述べている。ただ、こうした干渉があったにもかかわらず、塩谷が咸宜園を取り潰すなどの措置に出ることはなかった。のみならず、淡窓及び咸宜園の塾生たちに対し、常に丁寧な対応をしている。前述の永山での饗応もその表れであるが、ほかにも

・文政五年（一八二二）

（五月）二十六日。明府、隈町二遊ヒ、歸路、余カ家二過リ玉フ。諸僚屬多ク從ヘリ。茶及菓子ヲ捧ケタリ。遂ニ西塾ニ到リ塾生ニ相見シ慰勞ノ辭アリ。既ニ歸館シ玉ヒテ後、余門生二十余輩ヲ率イテ官府ニ到リ謝ス。

などである。要するに咸宜園への官府のスタンスは、様々な干渉は行ったが、本音のところでは、むしろその存在を自己の統治の域内に置きたいということにあった。

淡窓の官府への出講―官府一六講：右の官府の難の仔細はそれとして、淡窓自身は早くからその学才を認められ、十三歳の寛政六年（一七九四）には、代官羽倉秘教に招かれて『孝経』を講義している。その後も、官府での講義は度々行われた。すなわち

・文政四年（一八二〇）

（三月）十八日。官府ニ於テ、論語ノ講ヲ開ケリ。聴者、村尾市蔵、同市次郎、勝田近蔵、大坪運太夫、飯倉幸吉ナリ。村尾氏ノ宅ニ於テス。講終ツテ後、酒飯ヲ供ス。是ヨリ後、三八ヲ以テ講日トシ、彼方ニ赴クコト毎々ナリ。勝田ノ家ニ於テセシコトモアリシナリ。聴衆モソノ後數輩加レリ。

とある如くである。こうした中で、特筆されるのは郡代池田岩之丞の時代に於ける一連の講義である。淡窓が「官府一六講」と名づけたこの講義については首藤

助四郎氏の精緻な論考がある。「二六」とはいうまでもなく月のうち一と六がつく日、このとおり行われれば月六回の講義である。この時の一六講は弘化五（嘉永元）年（一八四八）六月六日から開講した。『日記』にはその仔細が記されている。

六月六日未牌 至官府。開孟子講。聴者自府君以下屬吏十余人。以一六為期。

六月二十一日 力疾赴官府一六講。如六日例。而加左傳。

六月二十六日未牌 赴官府講

七月朔 官府一六講如例

七月十一日 遂赴官府一六講

などとなる如くである。講義は十一月十六日まで、都合十八回行われている。講義はさらに十一月二十一日も行われる予定であったがこのときは「官府多事」のため中止となっている。

この間、十月六日は腹痛の為「未及講而帰」と記している。その次の十月十六日は「講義は「有微恙（軽い病気）」のため範治（青村）に代講させるなどのことがあったが、他はすべて淡窓が講義している。十一月二日には「赴官府講。補昨欠（昨日の休講）也。」とあり、前日の休講の補講をしている。

この官府一六講は、六月六日の第一講において「聴者自府君以下屬吏十余人」とあるように、代官以下ほぼ全員が聴講したようである。この一六講は、その後、嘉永七（安政七）年（一八五四）まで六ヶ年余継続したもので、範治（青村）の代講を含めて、実に百二十回余にわたっておこなわれた。これを年次で見ると右の嘉永元年の十八回に続き、嘉永二年は三月六日から八月二日まで二十五回、嘉永三年は五月十一日から八月六日まで十回、嘉永四年は六月二日から九月二日まで五回、嘉永五年は五月六日から十一月六日まで十七回、嘉永六年には四月二十六日より九月十六日まで二十回、嘉永七年には四月六日より八月二十六日まで実に二十七回に及ぶのである。その講義は孟子、左伝、論語、遠思樓詩抄続編、小学、析玄、義府、老子と多岐にわたっていた。こうしてみると、これは咸宜園官府分校ともいうべき状況であった。

ここで嘉永四年が五回と少ないのは淡窓の健康状態が特に悪かったためである。そのほかでも体調不良のため範治に代講させることがたびたびあったが、それも休講は避けたいという淡窓の強い意志の表れといえる。また官府側の都合による休講は、あるいは「府君不在」のため、あるいは「僚吏行役多き」ためであった。官府においても、この一六講がきわめて重要な「研修」の行事だったことがわかる。

ところで、嘉永元年から同七年といえは、淡窓六七才から七三才の間である。淡窓は嘉永七年十一月に講を閉じたあと、二年後の安政三年（一八五六）年にその生涯をおえたことを思えば、この間の精励ぶりにはたゞ敬服のほかはない。

かくて、永山城と永山布政所は、天領日田の政治上の重要遺跡であるだけでなく、咸宜園とその関連遺産としても、きわめて重要な文化遺産であるといえよう。さらにいえば、永山城に先行して築城された日隈城（亀山）も、築城当時の虎口や曲輪が良好な状態で残されている。亀山（公園）は、世に知られた名勝地であるが、近世日田の歴史を知る上でとりわけ重要な遺跡でもある。永山城と、日隈城。両城跡の調査を進め、その成果をふまえて、本格的な保存整備が行われれば、歴史の町日田の、さらに大きな拠点となるはずである。

四 咸宜園と豆田―共生の原風景

ここで、咸宜園と豆田・隈の町と共生ということにうつろう。豆田や隈の町では、咸宜園の塾生に対する有形・無形の支援がおこなわれていた。海原徹氏が指摘するように、それは奨学金の拠出、写本や家庭教師などのアルバイトの提供、住込みの書生（食客）の受け入れ等、その支援は多様であった。夜間に導引（按摩）に出る塾生もいた。托鉢や法事に向うく僧籍の塾生もいた。ちなみに多く僧籍の塾生は、町内の寺に寄宿したが、それはその所属する宗派を問わず自在に受け入れていた。加えて数多くの自宅通学生がいた。要するに日田の町筋では日常的に塾生の往来する姿が見られたのである。かくて咸宜園の存在が町の人のところ

の支えとなり、また町の人々が有形・無形の形で塾生の勉学と生活を支えた。そういう見事な共生の風景が見えるのである。

これら成宜園と日田の町の共生の諸相については、今後、残された史料によつて、いちいち実証的に解明していくことが喫緊の課題であるが、ここでは、他ならぬ淡窓自身による町内への出講、つまり出前授業について見てみたい。

詩会―町中への出講：『懷旧樓筆記』や『日記』にはこの出前授業の記事が数多く記されている。以下そのいくつかをあげておこう。

まずは淡窓が「詩会」と呼んだ類の集会である。『懷旧樓筆記』に

・文化十年（一八一三）

十一月晦日。三松寛右衛門、其別業二招キ、宴ヲナセリ。同坐ノ客。僧法海、僧東海、僧園隆、三松斎寿、鍋屋久右衛門ナリ。久右衛門ハ伊予屋ナリ。両三年前出テテ鍋屋ヲ続ケリ。予二絶句ヲ賦シテ主人ニ贈レリ。

君家邑政有清風 人道富年陳仲弓

両市街頭門不鎖 読書声湧月明中

竹屋松扉水一方 此中自與世相忘

窓前遍種名花草 半夜幽人夢亦香

また別に書画会という集いも見える。

・文化十三年（一八一六）

（二月）八日。限町鍋屋文兵衛カ家ニ書画会アリテ、赴ケリ。席ニ列スル者、僧圓什、僧法珍、三松斎寿、藤熙斎、佐藤葵亭、佐藤玄猷、館林清記、熊谷昇、鍋屋俊助、画師嘉慶ナリ。画書会ノ事、限町ニ於テ往々ニアリ。余独其席ニ列スルコトヲ好マズ。遂ニ行キタルコトナシ。此日玄猷来リテ、強テ予ヲ引イテ行ケリ。

これらのうち、特に「詩会」とみられる集いは、成宜園内でのそれを除いても、『懷旧樓筆記』と『日記』において管見にふれたものだけでも四十回を超える。その

会場は豆田と限の町うち、その近郊から郊外に及ぶが、ここではそのうち主として豆田とその周辺で開かれた集いを抄出しておこう。（以下カナ混じり文は『懷旧樓筆記』、漢文は『日記』による。）

・文化十三年

（八月）二十五日。小開亨、草野玄丈来。夜集於緑水亭。賦詩会者。三松斎寿、佐藤玄猷、亨、麻生伊織、宏、増太、熊谷昇、児玉茂、有事不至。享酒及飯至月高雞唱。而罷。斎寿婦家。他宿亭中、味旦而歸。

・（閏八月）十五夜。三松斎寿カ晚晴樓ニ会セリ。座客佐藤玄猷、小林安石、僧升道、児玉茂、佐野宏ナリ。此夜始メ陰リ後晴ル。余七律一首ヲ賦ス。

・文化十四年

（八月）二十一日。午後之館林清記宅。韓非子。応塩屋平右衛門請也。

聴者。平右衛門、京屋助九郎、鍋屋俊助、文兵衛、日隈幸市。晚飯而歸家。

・同年

（九月）十日。午時。携益多、会三松斎寿晚晴樓。会者、吉田紀四郎、合谷義策、児玉茂、釈玄海、恵禅、蒲池久市、館林清記、小関亨。日晡（くれ）而原震平、瑾次郎、釈園隆、熊谷昇至。自有詩会、是日為盛。至三更而散。

（同記事は『懷旧樓筆記』にも見える。）

・文政二年（一八一九）

（十月）廿四日。佐藤玄猷カ家ニ詩会有ツテ赴ケリ。潤二、研介従行セリ。会スル者。三松斎寿、館林清記、児玉茂、僧恵禅ナリ。中間ニ、予、玄猷、潤二ト舟ヲ浮ヘテ、龜山ノ陰ニ到レリ。時ニ一詩ヲ得タリ。

・文政六年（一八二三）

（九月）八日。謙吉ト共ニ蒲池久一（市）カ招ニ赴ク。久一カ家ヲ去ルコト四五丁、禅庵アリ。大聖寺ト名ケタリ。近頃経営ヲ加ヘ、其中ノ一室ヲ臨泉亭ト名ク。余席上久一二贈ル詩アリ。

・天保二年（一八三一）

（八月）十一日。城内ノ観音閣ニ会シテ、詩ヲ賦ス。会者謙吉、徳令、加膳、成策、

聞恵、恵禪、龍山、榮、久二ナリ。秋蟬ヲ以テ題トス。一絶ヲ得タリ。

・天保二年

(九月)五日。長善寺二会ス。会者謙吉、勲平、加膳、玄海、聞恵、久市、龍山ナリ。一律ヲ得タリ。曰ハク。

・天保四年(一八三三)

(三月)二十六日、長善寺詩会。謙吉、和一郎、世珉、丈山、法雨、仙吾、一次郎随。地主玄海。僧門恵、蒲池久市同座。申時帰家。

・天保七年(一八三六)

(八月)八日。得謙吉七月二十日書。巳時赴蒲池久市詩会。雁三郎、玄佳従行。同座釈玄海、恵禪、聞恵、松本龍山、久市父子、供飯及酒。日暮予與二生先帰。

・天保十二年(一八四一)

(二月)三日。設詩会。如二十三日例。使範治始詣限町講書。於鍋屋伊左衛門宅。・天保十六年(一八四五)

(九月)四日、塩屋平右衛門カ招ニ赴ク。量平、熊三郎従行ス。伊予屋伝七導ヲナセリ。彼方ニテ鍋屋藤右衛門、中津屋兵右衛門、升屋増治郎座ヲ同シクセリ。饗宴ノ後。小學三則ヲ講セリ。

等々である。このほか「論語」講や書会も開かれていた。『懐旧樓筆記』には



豆田の町並み

文化二年 予長福寺ニアル時、書会ト云フコトヲ始メタリ。五言ノ詩一句ヲ書キ、其ノ字ノ美悪ニヨリテ点数ヲ定メ、甲乙ヲ定メタリ。数句ノ後大ニ市中ニ行ハレ、其会ニ加ハル者、男女百二三十人ニ及ヘリ。其後其法変ラスト雖モ、書会ノコト今ニ伝ハリテ四十余年ニ及ヘリ。

などとあり長年にわたってこの書会がひらか

れていた。また

文化十四年(八月)廿一日。隈町、館林清記カ家ニ至リ、韓非子ヲ講ス。塩屋平右衛門カ求メニヨレリ。来リ聴ク者、京屋助九郎、鍋屋藤右衛門、鍋屋甚左衛門、日隈彦助ナリ。其後モ数度、清記カ家ニ至ツテ講ヲナセリ。

とあるように論語講や韓非子講が開かれていた。さらに加えて、先述した官府での一六講と同様の講が町中でも開かれていた。すなわち天保十四年(一八四三)七月には

二十六日 榎園カ家ニ至リテ小学ヲ講ス。聴者、伊三郎、棕野俊五、平井仙林、

伊予屋伝七、

油屋忠助、酢屋佐左衛門、中島屋善平、刀屋国助ナリ。講終リテ酒飯ヲ供ス。此後、一六ヲ以テ期トシ聴者ノ宅ニ於テ、輪次ヲ以テ講ヲナシ、地主ヨリ饗ヲ設ケタリ。「小学」所ヲ抄シテ講シ、亦、「析玄」全部を講セリ、時二ヨリテハ、他ノ書ニモ及セリ。此事、冬ニ至ツテ止メタリ。

この時の講については『日記』に詳細が記されている。すなわち

八月一日 詣榎園、講小学及析言。尋七月二十六日之会也。会以一六為期。

以下倣之。聴者添数人。未審其名。供飯如前例。中島屋善平為主。

八月六日 詣榎園。講小学、析言如例。酢屋佐左衛門為主。設供

九月六日 講於榎園如例。油屋忠助設供。

九月十一日 之榎園作講如例。油屋栄吉設供

九月十六日 之榎園講如例。伏見屋久左衛門設供。

とある如くである。講義は十一月六日まで都合十八回行われた。同様の一六講は天保十六年にも行われている。『懐旧樓筆記』には

初九月十六日。榎園ノ宅ニ於テ講ヲナセシコト、第一会ナリ。第二会、九月廿一日、榎園カ家ニ於テス。第三会廿六日、伊予屋博七カ家ナリ。第四会十月朔、酢屋佐左衛門カ家ナリ。第五会六日、油屋市郎右衛門カ家。第六会十二日、油屋忠助カ家。第七会十六日、酢屋勘三郎カ家。第八会廿日、油屋栄吉カ家。第九会廿七日、中島屋善平カ家。第十会十一月朔日、刀屋国助カ家。

第十一会六日、中村善右衛門、カ家ナリ。論語ヲ主トシテ、雑フルニ史記、小學、析玄ノ類ヲ以ツテス。講後必ス宴アリ。輪次ヲ以テ主人ト為レリ。是ニ至ツテ終レリ。楳園主トシテ、其ノ議ヲ唱フルナリ。

とある。ここにあるように、この一六講は淡窓の弟楳園の主唱によるものであった。会場も専ら楳園宅であるが、この楳園宅は咸宜園に近い明王寺に比定されている。注目されるのは、これらの集いに集まった人たちである。これに参加した人の名をあげると

三松寛右衛門、三松斎寿、鍋屋久右衛門 鍋屋文兵衛 鍋屋俊助 鍋屋藤右衛門、鍋屋甚左衛門、相良泰庵、塩屋平右衛門、京屋助九郎、升屋増治郎、丸屋幸右衛門、伊予屋伝七、中津屋兵右衛門、村尾市蔵、油屋忠助、油屋榮吉、油屋新次郎、油屋市郎右衛門、中島屋善平、伏見屋久左衛門、紙屋某、酢屋佐左衛門、酢屋勘三郎、中村善右衛門、藤瀬斎、佐藤葵亭、佐藤玄猷、日隈幸市、日隈彦助、棕野俊吾等がみえる。ここで鍋屋、京屋、升屋、丸屋、伊予屋がいずれも日田を代表する商家であることはいうまでもない。油屋、中島屋、伏見屋、酢屋、刀屋も豆田の古絵図に居宅の見える家である。咸宜園には、当然のことながら豆田・隈の町から多くの子弟が入門した。そうした町人の入門に応えるように、淡窓はかくも度々、町内に向き講義を行ったのである。今日という生涯教育というものであろうが、出かける恩師も師なら、ここに見える町方の有志の勉強ぶりも敬服に値する。加えてこれらの集いでは、いちいち「供具」「設具」、つまり会食の席が設けられた。ここまで見れば、この「共生」の在り方は、今日の大学等でもとうてい及びがたいものというほかないであろう。

五 淡窓・咸宜園と広瀬家

以上、咸宜園と日田の町、特に豆田との共生のかたちを見てきたが、豆田といえば、その魚町に他ならぬ淡窓の生家広瀬家がある。広瀬家は、いうところの豆

田の伝統的建造物群の主たる構成資産となつているところであるが、天領日田の屈指の商家にして、淡窓はじめ広瀬八賢と称される数多くの人材を輩出した家である。淡窓と咸宜園の歴史とその関連遺産を考える場合、避けて通れないところである。にもかかわらず、この広瀬家の歴史と文化財についての研究は、これまでに必ずしも十分にはなされていとはいえない。

そうした中で、今年度、日田市教育委員会は、広瀬家の史跡指定をめざして本格的な学術調査を実施した。その成果は『淡窓生家 広瀬家の歴史と業績』としてまとめられている。筆者もその巻末に、今回の調査成果をふまえながら、広瀬家の保存についていくつかの私見を示した。以下その骨子をふまえながら咸宜園の関連遺産としての広瀬家について重ねて私見を添えたい。

まず注目すべきは「史跡」としての広瀬家の歴史的価値である。広瀬家は、初代五左衛門以来、火災による家屋の消失、また歴代による改築・普請などを経つつも、建物の多くは建築年代も明確に確認されており、全体として当代の豪商の屋敷構えの全体像が窺える貴重な近世の建築遺構であることが確認されているのである。広瀬家に残る、それぞれの時代の「家相図」も建物の履歴を知る上で貴重な史料となつていいる。

さらに注目されるのは、平成二三年、広瀬家に隣接する旧中村家の発掘調査と、これに連動して行われた広瀬瀬家の建物の基礎構造の調査である。これにより、中村家および広瀬家の屋敷内が、その地下に歴代の建物の礎石等の遺構を、重層的に包含する遺跡であることが明らかになった。

このほか広瀬家の菩提寺である豆田の大超寺の広瀬家関連の墓地の全容が明らかにされ、これも重要な歴史的資産であることが確認された。また従来、淡窓と咸宜園の墓所として国史跡に指定されている「長生園」についても、これをむしろ広瀬家の分家の墓地のひとつとして位置付ける所見が示されている。これら墓所と菩提寺大超寺のほか、淡窓の歴史的な開講の場となつた長福寺等も、広瀬家との関わりをふまえて、あらためて歴史的な位置づけを図るべきと思われる。

かくて広瀬家は、それ自体史跡としての高い価値を有する文化遺産であること

が明らかになったが、「咸宜園」とその関連遺産という、本稿の視点に立てば、当然この広瀬本家と淡窓・咸宜園の有形・無形の関係が明らかにされなければならないが、ここでは、さしあたり指摘できるいくつかのことをとりあげておきたい。

まずは他ならぬ淡窓の「生家」としての広瀬家の位置づけである。淡窓は幼少年代、二歳から七歳の間、堀田村の秋風庵に住む伯父月化に養育されたほかは、この魚町の父母の膝下で育てられた。その後も、寛政九年（一七九七）からおよそ二年間、福岡の亀井南冥・昭陽の塾に遊学したほかは広瀬家に住んだ。文化二年（一八〇五）三月、淡窓は豆田の長福寺の学寮で講義を開始するが同年六月には一旦実家にもどり南家の土蔵で教授した。そして同年八月、淡窓師弟は豆田町の大坂屋林左衛門の家に移り成章舎とした。が、文化三年（一八〇六）三月、淡窓は再び実家の南蔵にもどって講義を行っている。広瀬家は、ひととき淡窓の講義の場でもあったのである。淡窓は文化四年（一八〇七）、桂林園を興したが、この時も健康状態が悪いため、ほとんど実家から通って教えるという状況であった。

この間の住いについて、淡窓は、その自伝『懐旧樓筆記』において、毎年、年のはじめに、いちいち詳しく記している。すなわち、その幼・少年時代は「魚町にあり」「父母の膝下にあり」などとあるのみであるが、その後は「魚町の南家」「北家楼上」「南家土蔵内」「南家北軒の東偏」などと具に記している。淡窓が、本当の意味で広瀬家を出たのは文化一四年（一八一七）、淡窓三六歳の二月、豆田の南にある堀田村に塾舎（西寮）と淡窓の新宅を建て転居した時である。してみれば、広瀬本家を単に淡窓の「生家」と呼んで済ますのは躊躇するところである。

咸宜園と広瀬家の関係といえば、『懐旧樓筆記』などに淡窓と咸宜園の教育の様々な場面で、広瀬家の家族が同席し、同行する様子が繰り返し記されている。前述のように咸宜園では、堀田村の塾構内での授業だけでなく、折に触れて師弟は相同行して塾外に出て、日田の山野、河川、神社・仏閣などをいわば野外の教室として、遊び詩を読み、時に放學した。この場合「行厨を開く」、つまり昼食

をとることが常であった。このような遊山においても、しばしば父母、伯父、伯母、久兵衛ら広瀬本家の人々が同行している。広瀬家の人々は、淡窓とその門下生の学外活動の場でも、度々同行し共飯していたのである。

咸宜園と広瀬家といえば、広瀬家の咸宜園に対する経済的支援があったことはいうまでもない。その詳細については既往の研究や上記の日田市教育委員会の報告書にゆずるが、要するに咸宜園塾主の会計は、広瀬本家が全面的に協力し、下支えしていたものであった。

周知のように広瀬家は淡窓のほかにも久兵衛・旭荘等の多くの人材を輩出した。特に旭荘は大坂を拠点に全国を巡り菅茶山の康塾、緒方洪庵の適塾、吉田松陰の松下村塾とも深いかかわりを持つなどしたが、その生涯にわたって淡窓と広瀬本家への思いを持ち続けた。広瀬本家の持つこうした求心力と、その長い持続こそが淡窓・咸宜園の教育活動を支えた力であった。



広瀬家の現況

このような広瀬家の歴史、そこで輩出した淡窓ほかの先賢の業績、そして何より淡窓・咸宜園の歴史を明かす史料の過半は、広瀬家にある「広瀬先賢文庫」に収蔵・保管され今日に至っている。史跡としての咸宜園跡の保存と整備、淡窓と咸宜園に関する調査・研究が今日の水準にあるのも、広瀬家に負うところが大きいのはいうまでもない。伝統的建造物群保存地区としての豆田には、すでに長福寺本堂や草野家の建物などの国指定の重要文化財があるが、咸宜園の関連遺産群としての視点でいえば、この広瀬家が、この関連遺産群の中で第一義的意義を持つのはあらためて指摘するまでもなからう。

おわりに

本稿では、冒頭「近世日本の学校遺産群」の取組みの経緯をふまえて、咸宜園の関連遺産群の捉え方の方向について私見をのべた。その上で、特に前掲の③の咸宜園と日田の町の共生という視点に絞って、浮かび上がる関連遺産として永山城と布政所跡、そして豆田・隈の町と咸宜園のかかわりについて所見を述べた。

咸宜園と関連遺産の調査・研究ということでいえば、前掲②の「遊山」「放學」にかかわる遺産群の正確な把握が必要である。「懐旧樓筆記」や「淡窓日記」(以下「日記」)によれば、淡窓師弟と広瀬家の親族が、あるいは遊山しあるいは放學するなどした数多くの記事が見えるが、これらに登場する神社・寺院、名勝、旧跡等は数十か所にのぼる。しかもその多くは、今なお往時の姿をとどめている。そこには当然のことながら大原八幡宮や慈眼山永興寺や亀山(公園)、岳林寺など周知の史跡等が見えるが、このほかにも、例えば淡窓・旭荘はじめ広瀬家の人々が旅立ち、あるいは帰郷するときの「坂迎え」の場であった羽野天満宮(菅相寺)、淡窓師弟がくりかえし「詩会」などを開いた黒男(玉垂)神社、広瀬家の氏神ともいえる竜馬森稻荷祠(若八幡社)など、それ自身史跡等として保護すべき価値を持つ所も数多く含まれている。これらの全体と、これを歩いたルート等については、目下現地調査をすすめているところであるので、その仔細は後日にゆずりたい。こうした取り組みは、ひとり「近世学校遺産群」のプロジェクトに資するだけでなく、咸宜園の教育の実相を「日田」という風土の中において、いわば歴史地理的視点で明らかにすることにつながると考える。それは、咸宜園の教育が存在した時間と空間の復元ということに通じるはずである。ここで時間Ⅱ歴史、空間Ⅱ風景と読み替えば、淡窓がこよなく愛し、門弟たちの知性と感性を育んだ日田の歴史と風景の復元の作業は、今日もなお日田が誇る貴重な資産の発掘と再確認の仕事だともいえよう。

注・文中淡窓の著作からの引用はすべて『増補淡窓全集』増補復刻版(思文閣出版社・一九七二)によった。文中、資料・文献の引用にあたっては、必要により常用漢字・現代仮名遣いに改めたところがある。「広瀬」「廣瀬」の表記はすべて「広瀬」に統一した。

(参考文献)

- 日田郡教育会編『増補淡窓全集』上・中・下巻(一九二五～一九二七)、同増補復刻版(思文閣出版社・一九七二)
- 『日田市史』(日田市・一九九〇)
- 日田市教育委員会『日田豆田町』日田市豆田町伝統的建造物群保存対策調査報告(二〇〇四)
- 日田市教育委員会『永山城跡』(二〇一一)
- 日田市教育委員会『永山城跡発掘調査現地説明会資料』(二〇一一)
- 日田市教育委員会『日田市の歴史と文化財』(一九九六)
- 中村幸彦・井上敏幸編、廣瀬貞雄監修『廣瀬先賢文庫目録』(思文閣出版・一九九五)
- 井上義巳『廣瀬淡窓』(吉川弘文館・一九八七)
- 工藤豊彦『廣瀬淡窓・廣瀬旭荘』(明徳出版・一九八八)
- 田中加代『廣瀬淡窓の研究』(ベリかん社・一九九三)
- 狭間 久『廣瀬淡窓の世界』(大分合同新聞社・一九九九)
- 海原 徹『廣瀬淡窓と咸宜園』(ミネルヴァ書房・二〇〇八)
- 岡村 繁注『廣瀬淡窓・廣瀬旭荘―江戸詩人選集九』(岩波書店・一九九二)
- 杉本 勲編『九州天領の研究』(吉川弘文館・一九七六)
- 首藤助四郎『広瀬淡窓の塾外教育―特に一六講について』(『歌天』十六号・一九八七)
- 加藤周一『日本文化における時間と空間』(二〇〇七・岩波書店)
- 後藤宗俊『地域の歴史と文化遺産』(二〇一〇)
- R・ルビンジャー『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』(石附実・海原徹訳・サイマル出版会・一九八二)
- 水戸市教育委員会『学びの文化を世界遺産に』(二〇一〇)
- 徳田 武『広瀬旭荘の足利学校行』(『江戸風雅』第三号・二〇一〇)
- 日田広域文化・観光フォーラム実行委員会『第一回 日田広域文化・観光フォーラム』レジュメ(二〇一一)

(後藤宗俊・咸宜園教育研究センター名誉館長)

I. 教育普及事業

1. 展示事業

(1) 特別展 廣瀬淡窓と咸宜園

会 期：平成22年10月3日から11月30日まで

内 容：本展は、開館記念の特別展として企画し、
廣瀬淡窓の肖像や門下生の中島子玉、釈
徳令などの肖像、咸宜園絵図、当時の咸
宜園で使用された入門簿や月旦評などを
展示した。

協 力：財団法人 廣瀬資料館、光善寺、善教寺

展示品：廣瀬淡窓座像（朝倉文夫作）

廣瀬淡窓肖像（高木豊水画）

中島子玉肖像（咸宜園門下生）

釈徳令肖像（咸宜園門下生）

咸宜園絵図（明治16年 小栗布岳画）

芭蕉翁自画賛

廣瀬淡窓五言古詩「卜居」（六曲一隻）

月旦評（天保13年・大村藩校五教館）

月旦評（明治4年・咸宜園）

入門簿（巻1）入門簿（淡再第31号）

入門簿（勝屋講師時代）

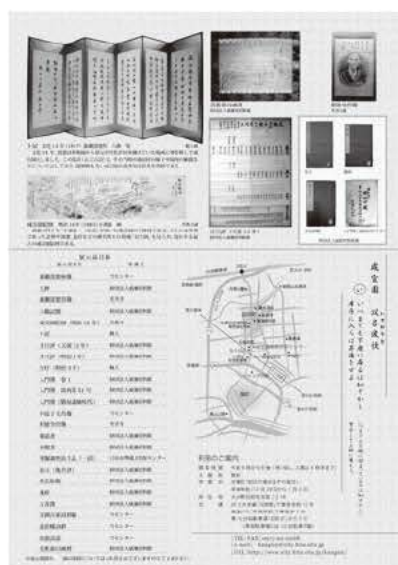
天秤、行灯（明治3年）、六橋記聞

御請書、申聞書、約言（亀井評）、義府

析玄原稿、万善簿、宜園百家詩初編

遠思樓詩鈔、淡窓詩話

咸宜園跡発掘調査出土品（一括）



公開展示室



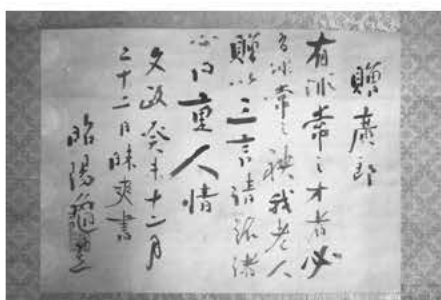
咸宜園絵図（明治16年）小栗布岳画（善教寺蔵）

(2) 収蔵品展

会 期：平成22年12月3日から
平成23年2月13日まで
内 容：新たに収蔵した史料の一部を展示した。
協 力：財団法人 廣瀬資料館
展示品：窪田治部右衛門書幅
窪田治部右衛門書幅
秋風庵月化自画賛扇面
亀井昭陽書「贈廣郎」
月旦評（慶応二年）
入門簿（淡窓時代、勝屋講師時代）
扁額 遠思楼、扁額 秋風庵
廣瀬淡窓掛軸「彦山」
廣瀬淡窓掛軸「鶴」
廣瀬淡窓掛軸「讀搜神記」
廣瀬淡窓掛軸「寄題日高生安素軒」
廣瀬青邨掛軸
拓刷 長三洲「眞草簡詩帖」
長三洲習字手本
約言（亀井評）、析玄原稿、義府
万善簿、宜園百家詩初編
遠思楼詩鈔、淡窓詩話

(3) 企画展

咸宜園とその門下生たち～漢詩人 廣瀬旭莊～
会 期：平成23年2月15日から3月31日まで
内 容：廣瀬旭莊は咸宜園を開いた淡窓の末弟で、咸宜園の第2代塾主を務めた。通称は謙吉。号は旭莊。生没年は文化4年（1807）～文久3年（1863）。豊後国日田生まれ。摂津国池田にて57歳で死去。儒学者・漢詩人として活躍し、30歳で日田をはなれてからは江戸や大坂を拠点として多くの門弟を教育した。本展では、主に旭莊に関する資料を展示した。
協 力：財団法人 廣瀬資料館
展示品：廣瀬旭莊肖像画（西島青甫画）
廣瀬旭莊七言古詩（六曲一隻）
廣瀬旭莊画賛、城入儒者招聘経緯書
廣瀬旭莊遺愛品（水晶印、硯等）
謙吉叙位記及び沙汰書、梅墩詩鈔
日間瑣事備忘、梅墩詩鈔第五編
九桂草堂隨筆
廣瀬淡窓肖像画（首藤雨郊画）
廣瀬淡窓肖像画（木下逸雲画）
菅茶山七言絶句二行書、菅茶山詩鈔



亀井昭陽書「贈廣郎」



廣瀬旭莊七言古詩（六曲一隻）

2. 講座・講演会・イベント等

開催日	事業名など	場 所	そ の 他
8月7日 ～8月23日	「淡窓先生に学ぶ～各学校の取り組み」	パトリア日田 ギャラリー	咸宜小学校による咸宜園の取り組みを パネル展示
8月19日	「立志の道を歩こう」 門下生・清浦奎吾の顕彰事業	咸宜園跡	山鹿市との共催 参加者 220名（内、市内児童53名）
9月30日 ～11月7日	「淡窓先生に学ぶ～各学校の取り組み」	パトリア日田 ギャラリー	咸宜小学校・桂林小学校による咸宜 園の取り組みをパネル展示
10月2日	（記念講演会） 「咸宜園教育に何を学ぶか」 京都大学名誉教授 海原 徹 氏 （座談会） コーディネーター 別府大学長 豊田寛三 氏	パトリア日田 小ホール	市制70周年記念事業 参加者 277名
10月31日 ～11月1日	「咸宜園門下生子孫の集い」 ①咸宜園に集う門下生たち ②咸宜園を育んだまち日田と門下 生たち ③未来へつなぐ淡窓の教え	①長福寺本堂 ②アプロディール 紙音 ③広瀬淡窓墓 咸宜園跡	①門下生子孫の集い 123名 ②門下生子孫の交流会 78名 ③平成淡窓祭（淡窓会）50名 2日間で計251名が参加
11月13・14日	秋風庵・遠思楼のライトアップ	咸宜園跡	「日田天領まつり」との連携
11月14日	演奏会と「お茶会」		
12月23日	咸宜園平成門下生（仮称） 市民応援団	市役所 中会議室	参加者 51名 その後、「咸宜園平成門下生之会」 の発足となる。



淡窓先生に学ぶ



立志の道を歩こう



開館記念座談会



秋風庵説明風景



入門ぼくす体験の様子



ゆるキャラ「たんそうさん」

3. 記念事業

本年実施された咸宜園教育研究センター開館記念に伴う事業は、すべて日田市制70周年記念事業として行われました。

(1) 開館記念式典、記念講演、座談会

開催日：平成22年10月2日(土)

内 容：記念式典（咸宜園教育研究センター）
記念講演（パトリア日田小ホール）
座談会（同上）

主 催：日田市、日田市教育委員会

第1部 記念式典

- ・記念式典
- ・咸宜小学校及び桂林小学校による漢詩朗詠
- ・特別展の内覧会



後藤宗俊 咸宜園教育研究センター名誉館長

第2部 記念講演・座談会

- ・記念講演
演 題：「咸宜園教育に何を学ぶか」
講 師：京都大学名誉教授 海原 徹氏
- ・座談会
テーマ「咸宜園教育に何を学ぶか」
コーディネーター
別府大学学長 豊田 寛三 氏
パネラー：
京都大学名誉教授 海原 徹 氏
財団法人 廣瀬資料館理事長 廣瀬 貞雄 氏
咸宜園教育研究センター名誉館長

後藤 宗俊 氏

日田市長

佐藤 陽一 氏

(2) 咸宜園門下生子孫の集い

開催日：平成22年10月31日(土)～11月1日(日)

内 容：センターの開館記念に伴う事業として、廣瀬淡窓の命日である11月1日にあわせて、「咸宜園門下生子孫の集い」を開催した。全国に広がる咸宜園門下生の子孫を招集し、門下生子孫の交流を促進するとともに咸宜園および咸宜園を育んだ日田市のPRを行った。また、今回の取り組みを応援していただくため市民にも呼びかけ、咸宜園門下生の子孫でなくとも、我こそは現代の咸宜園門下生という有志も募り、関連行事は盛大に行われた。

主 催：日田市、日田市教育委員会（第1・2部）
淡窓会（第3部）



門下生・清浦奎吾のご子孫

第1部「咸宜園に集う門下生たち」

会 場：長福寺本堂

廣瀬淡窓が最初に塾を開いた場所は長福寺学寮であったことから、私塾「咸宜園」の始まりとも言える長福寺（本堂は重要文化財）に、門下生の子孫が集まった。その後、塾は成章舎、桂林園、咸宜園と移っていくが、咸宜園と関わりの深い豆田町（重要伝統的建造物群保存地区）と併せて、先祖の学んだまちを体感する「淡窓ゆかりの地ウォーキング」を実施した。

第2部「咸宜園を育んだまち日田と門下生たち」

会 場：アプロディール紙音



第2部の様子

全国から集まった門下生子孫に咸宜園を育んだ

まち日田の魅力の紹介をするとともに、門下生子孫の交流と親睦を深める場となった。今後は、咸宜園を機縁として全国的なネットワークが構築され、交流が盛んになることが期待できる取組みとなった。

第3部「未来へつなぐ淡窓の教え」

(淡窓会の「平成淡窓祭」と共催)

会 場：史跡咸宜園跡・長生園

門下生の子孫が「平成淡窓祭」に参加し、廣瀬淡窓の遺徳を偲ぶとともに、現代、そして未来につながる淡窓の教え（咸宜園教育）について認識をあらたにする機会となり、今回の「咸宜園門下生子孫の集い」を締めくくった。

4. 刊行事業

(1) 読本

『淡窓先生ものがたり』

A5版 93頁

頒布価格 500円

小学生高学年用に作成した本で、市内の小学5・6年生に配布した。



(2) パンフレット

『廣瀬淡窓と

咸宜園の教育』

B5版 16頁

頒布価格 100円



5. 訪問講座

平成22年 5月19日	日田市女性団体連絡協議会 30名
平成22年 6月 2日	日田市立津江中学校 22名
平成22年 8月26日	日田市学校教育課 14名
平成22年10月30日	中津市しもげ商工会 150名
平成23年 3月 5日	日高町老人会 30名

6. 皇太子殿下 行啓

平成22年11月14日、第30回記念大分国際車いすマラソン大会を観戦のため、皇太子さまが来県し、咸宜園跡および咸宜園教育研究センターを視察された。

7. その他の取り組み

第14回 平成淡窓祭

淡窓会主催による平成淡窓祭が第14回目を迎えた。本会は廣瀬淡窓を顕彰するため、昭和27年にその前身となる組織を発足。現在の会員数は約350名を数える。

日 時：平成22年11月1日 午前10時～正午

会 場：史跡咸宜園跡（秋風庵にて）

主 催：淡窓会



Ⅱ. 史料収集事業

1. 寄贈史料

①和肅堂廣瀬先生書 1点

咸宜園第3代塾主・廣瀬青邨の書。慶応三年(1867)の陰暦7月の上旬に青邨によって書かれたものか。

②廣瀬淡窓書幅 1点「寄題日高生安素軒」二首の一

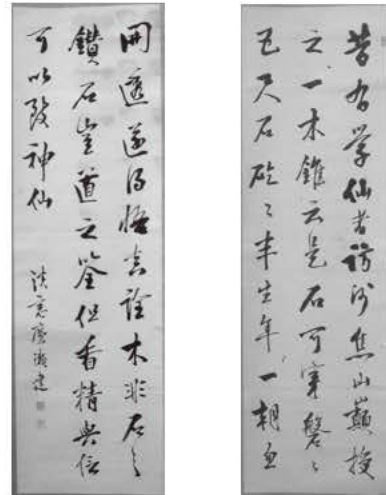
咸宜園初代塾主・廣瀬淡窓の書幅。『遠思楼詩鈔第二編下』所収の五言絶句で、「寄題日高生安素軒」の二首のうちの一首目。

③廣瀬淡窓書幅(双幅) 1点「讀神記」八首の二 咸宜園初代塾主・廣瀬淡窓の書幅。『遠思楼詩鈔第二編下』所収の五言長律で、「神記」を読み、作った八首の漢詩のうちの二首目である。

「神記」とは中国の六朝時代に東晋の干宝という人物が書いた小説で、4世紀頃に成立したものと考えられている。(写真)

④廣瀬濠田書幅 1点

咸宜園第3代塾主・廣瀬青邨の長男で、第8代塾主を務めた濠田(貞文)の書幅。濠田は東京で官途に



ついていたが、青邨の没後、日田に帰って公立教英中学校校長となり、その一方で咸宜園の再興を図り、明治18年(1885年)2月から明治20年(1887年)11月まで塾を主宰した。後、衆議院議員、日田町長等を務めた。

2. 寄託史料

①廣瀬淡窓書幅 1点

咸宜園初代塾主・廣瀬淡窓の書幅。『遠思楼詩鈔卷上』所収の七言絶句で、「鶴」と題した漢詩。(写真)

②廣瀬旭莊書幅 1点

廣瀬淡窓の末弟で咸宜園第2代塾主を務めた廣瀬旭莊の書幅。五言絶句。旭莊は24歳で咸宜園の跡を継ぐが、30歳で上坂し、開塾。37歳で江戸に出て、門下生に教授する。大半を日田から離れ、大坂を中心に当時の著名人たちと交流し、また各地を訪れ筆跡を残している。



③廣瀬青邨書幅 1点

咸宜園第3代塾主・廣瀬青邨(矢野範治)の書幅。七言絶句。青邨は淡窓の門下生で養子となり、淡窓を補佐し、咸宜園の塾主となった。淡窓の甥の林外に塾主を譲った後は各地で出仕し、東京に居を定め、東宜園などを開塾した。

④長三洲書幅 1点

廣瀬淡窓、旭莊の門下生であった長三洲の書幅。『浪上雜詠依錢仲文江行無題詩韻』五十首中の一つで、『三洲居士集』所収。五言絶句。三洲は咸宜園において、廣瀬林外、田代潤卿(俊次)らと共に「宜園三才子」と呼ばれた。咸宜園の後、大坂の旭莊の元で学び、倒幕活動に身を投じた。維新後は新政府に出仕して学制の制定に参画した。

⑤長三洲書幅 1点

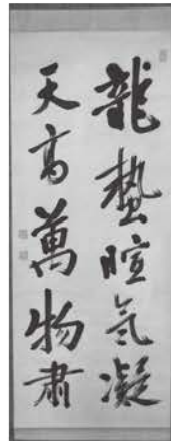
廣瀬淡窓、旭莊の門下生であった長三洲の書幅。「梧桐清暑」と題す漢詩で、『三洲居士集』所収。七言絶句。三洲が明治6年(1873)頃、西南学区を巡視中の詩作か。

⑥平野五岳書画 1点

廣瀬淡窓の門下生で、日田専念寺住職であった平野五岳の書画。『五岳詩稿』所収の七言絶句で、「漫成」と題した漢詩。詩自体は明治6年(1873)頃の作と考えられるが、本書画は五岳80歳の時の作か(明治21年戊子夏日)。平野五岳は詩・書・画に優れ、「三絶僧」と評された。

⑦平野五岳書幅 1点

廣瀬淡窓の門下生で、日田専念寺住職であった平野五岳の書幅。「京城懷劉石秋在飛州」と題した七言絶句。五岳が京都滞在中に同じ咸宜園の門下生であった劉石秋のことを想い、詠んだもの。



⑧亀井南冥書幅 1点

廣瀬淡窓の師、亀井南冥の書幅。中国、西晋の詩人・張協の『雜詩之二』の「龍盤喧氣凝、天高万物肅」の二句を引用したもの。亀井南冥は福岡藩の儒員となった後、西学・甘棠館の祭酒となる。しかし東学・修猷館との軋轢が絶えず、蟄居謹慎の身となる。その状況を思い、張協の詩を詠んだものか。(写真)

⑨亀井昭陽書 (和康堂珍藏) 1点

廣瀬淡窓の師、亀井昭陽の書幅。「贈廣郎」と題し、才能を認めながらも淡窓を教える論ず言葉を贈っている。父である南冥が失脚した後、家督を継いだ。詩才は南冥に及ばなかったが当代一流の博学。

⑩戸早春郵書幅 1点

廣瀬淡窓の門下生であり、私塾・蕨春園を開いた恒遠庵窓に学んだ中津の医者、戸早春郵の書幅。平野五岳らと交流があった。扇城吟社を創設し、漢詩壇の振興をはかった。

⑪中村正直書幅 1点

明治時代前期の儒学者、教育者、教育的学者である中村正直の書幅。五言絶句。慶応2年(1866)、英国に留学。帰国後は明治4年S.スマイルズの「西国立志編」、5年J.S.ミルの「自由之理」を翻訳・紹介するなど、文明開化と啓蒙思想の普及に努めた。

⑫長三洲書「眞草簡詩帖」 1点

廣瀬淡窓、旭荘の門下生であった長三洲の書。折本、左版。明治15年4月20日出版。習字・詩の手習い本として作られたものか。(写真)



⑬長三洲書「詩帖」 1点

廣瀬淡窓、旭荘の門下生であった長三洲の書。折本。明治14年5月23日出版。習字・詩の手習い本として作られたものか。

⑭廣瀬淡窓書幅 1点「長溪道上作」二首の二

咸宜園初代塾主・廣瀬淡窓の書幅。『遠思樓詩鈔第二編上』所収の五言絶句で、「長溪道上作」の漢詩二首のうちの二首目。三句目と四句目が『遠思樓詩鈔』に収められているものと異なる。

⑮平野五岳扁額 1点

廣瀬淡窓の門下生で、日田専念寺住職であった平野五岳の扁額。「秋声書屋」と書かれている。「己丑」とあり、明治22年(1889)、五岳81歳の作か。

⑯平野五岳扁額 1点

廣瀬淡窓の門下生で、日田専念寺住職であった平野五岳の扁額。書画や詩作を楽しむ様子が画かれ、五岳作の狂歌も書かれている。「丙寅」とあり、慶応2年(1866)、五岳58歳の作か。(写真)



⑰平野五岳扁額 1点

廣瀬淡窓の門下生で、日田専念寺住職であった平野五岳の扁額。⑯の扁額と同様に書画や詩作などを楽しむ様子が画かれ、狂歌が書かれているが、碁を打つ様子が追加され、狂歌も絵に対応したものとなっている。

⑱廣瀬淡窓書幅 1点

咸宜園初代塾主・廣瀬淡窓の書幅。『遠思樓詩鈔卷上』所収の七言絶句で、「彦山」と題した漢詩。文化7年(1810)9月、淡窓が英彦山に参詣した際に詠んだもので、淡窓七絶中の傑作といわれる。(写真)



⑲窪田治部右衛門書幅 1点

最後の西国筋郡代である窪田治部右衛門鎮勝の書幅。中国、三国時代の蜀漢の宰相、諸葛亮の「静以修身、儉以養徳」を書いている。

3. 寄贈図書

- ・「葛原家資料」にみる偉人たち 福山市教育委員会
- ・菅茶山～その生涯と交友 福山市教育委員会
- ・菅茶山ゆかりの絵画展
 - ―絵画でたどる菅茶山の交友― 福山市教育委員会
- ・近世の学び舎 寺子屋～私塾～藩校 福山市教育委員会
- ・軀の津 中村家文書目録Ⅰ 福山市教育委員会
- ・ことばを旅する 文藝春秋
- ・豆田滞在型観光研究事業報告書
 - NPO法人本物の伝統を守る会
- ・戸倉町誌第一巻（自然編） 千曲市教育委員会
- ・戸倉町誌第一巻（民俗編） 千曲市教育委員会
- ・戸倉町誌第二巻歴史編 上 千曲市教育委員会
- ・戸倉町誌第三巻歴史編 下 千曲市教育委員会
- ・廣瀬青邨詩鈔 財団法人廣瀬資料館
- ・広瀬先賢文庫目録 財団法人廣瀬資料館
- ・普及版 廣瀬資料館図録 財団法人廣瀬資料館
- ・天領日田・玖珠の義民 穴井六郎右衛門と代官政治 没後二百六十年 自然と史跡探訪会
- ・史料館研究紀要 第14号 大分県立先哲史料館
- ・史料館研究紀要 第15号 大分県立先哲史料館
- ・図説 明治の近代化につながった江戸の科学力
 - 学習研究社
- ・小栗栖香頂師百回忌法要記念
 - 教法のため 人びとのため 妙正寺
- ・専念寺所蔵 五岳上人遺墨遺品集 専念寺
- ・求来里喜平―百姓一揆に消えた悲劇の人足立喜平の生涯― 足立栄子
- ・海はだれのものか 埋立・ダム・原発と漁業権
 - 熊本一規
- ・エピソードでつづる吉田松陰 海原徹・海原幸子
- ・吉田松陰に学ぶ 現代に語りかける叡智 海原徹
- ・日田文学 五十四号 河津武俊
- ・豊国の歴史考古学研究 個人
- ・國學院大學大学院紀要―文学研究科―第39輯
 - 國學院大學
- ・広瀬淡窓の教育 個人
- ・遠帆楼詩鈔前編 個人
- ・遠帆楼詩鈔後編 個人
- ・白石廉作漢詩稿集 個人
- ・梅園学会報 第32号 個人
- ・梅園学会報 第33号 個人
- ・吉井町誌 第1巻 個人
- ・吉井町誌 第2巻 個人
- ・吉井町誌 第3巻 個人
- ・沼尻墨僊―城下町のエドモンの教育者 土浦市立博物館
- ・入門 山田方谷 山田方谷に学ぶ会
- ・瀬原泰蔵小伝―長州奇兵隊の光と影に生きた男 瀬原倫
- ・閑谷学校『あいうえお論語』
 - 財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
- ・閑谷学校研究 第14号
 - 財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
- ・閑谷学校資料館図録
 - 財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
- ・閑谷学校釈菜 財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
- ・閑谷学校ゆかりの人々
 - 財団法人特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会
- ・『天領日田』第二十八・二十九合併号
 - 天領日田を見直す会
- ・北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類 歴史第7号 北九州市立自然史・歴史博物館
- ・建造物詳細調査概報―武田塾木造塾舎―
 - 柏原市教育委員会
- ・心学―大島有隣・関口保宜―（第一集）
 - 杉戸町教育委員会
- ・青谿書院ルネサンス 池田草庵研究フォーラム
 - 養父市教育委員会
- ・別府市の文化財と保護樹 別府市教育委員会
- ・高梁市歴史美術館コレクション選 高梁市歴史美術館
- ・山田方谷の世界―高梁市歴史美術館収蔵品から―
 - 高梁市歴史美術館
- ・日田祇園會 個人
- ・新杵築史談 杵築偉人伝第五号 杵築史談会 久米忠臣
- ・杵築城物語 杵築史談会 久米忠臣
- ・杵築の書・画人名鑑 杵築史談会 久米忠臣
- ・子どものための美術教育―学校での図画工作科教育と家庭でのART教育― 向野康江
- ・平野五岳詩選訳注 専念寺
- ・高梁市立中央図書館所蔵古書分類目録
 - 高梁市教育委員会
- ・代官塩谷大四郎資料篇 久米忠臣
- ・東アジア前近代の学校と教育に関する国際シンポジウム論文集 福岡女学院大学 難波征男
- ・大分の先人たち 個人
- ・地域の歴史と文化遺産 後藤宗俊
- ・近世の学校建築 株式会社ぎょうせい
- ・泊園 創刊号 関西大学泊園記念会
- ・泊園 第二号～第四十九号 関西大学泊園記念会
- ・泊園記念会創立50周年 特別記念展示 展覧目録
 - 泊園記念会・関西大学東西学術研究所
- ・泊園書院歴史資料集―泊園書院資料集成―
 - 泊園記念会・関西大学東西学術研究所
- ・収蔵品目録 美術・工芸 1 大分県立歴史博物館
- ・収蔵品目録 歴史 1 大分県立歴史博物館
- ・収蔵品目録 歴史 2 大分県立歴史博物館
- ・2003 特別展 二千年の鼓動 弥生土器の世界
 - 大分県立歴史博物館
- ・宇佐大路―宇佐への道調査― 大分県立歴史博物館
- ・大分県立歴史博物館 研究紀要 12 大分県立歴史博物館
- ・石造文化財の保存対策のための概要調査
 - ―石造文化財の基礎調査報告書― 大分県立歴史博物館

- ・平成12年度特別展 古代王権への道
ー再発見 九州島ー 大分県立歴史博物館
- ・法隆寺の世界ーいま開く仏教文化の宝庫ー
大分県立歴史博物館
- ・弥勒憧憬ー道長の夢 五十六億七千万年後の救いー
大分県立歴史博物館
- ・免ヶ平古墳 史跡川部・高森古墳群保存修理事業
報告書 大分県立歴史博物館

- ・八幡信仰とその遺宝 大分県立歴史博物館
- ・八幡大菩薩の世界 大分県立歴史博物館
- ・近世日本の学問・教育と水戸藩 水戸市教育委員会
- ・東アジア文化交渉研究 別冊第2号
東アジアにおける書院研究
関西大学文化交渉学教育研究拠点

4. 咸宜園関係参考文献

平成22年度までの間に発行された単行本を除く、紀要・雑誌等の論考や記事を収録

- ・広瀬淡窓と広瀬旭荘『西南文運史論』武藤長平 岡
書院 1926
- ・教賢広瀬淡窓『教育学研究』3巻8ー10 乙竹岩造 日
本教育学会 1935
- ・淡窓先生と陰陽録『改修和語陰陽録』袁了凡、四方
文吉 1935
- ・「秋風庵月化」『近世文学の研究』田村専一郎 藤
村博士功績記念会 至文堂 1936
- ・教育家としての広瀬淡窓『日本諸学振興委員会研究
報告』第1篇 小西重直 文部省教学局 内閣印刷局
1937
- ・蛭雪事業鈔『伝記』5-1 森銑三 伝記学会 1938
- ・広瀬淡窓を繰り返す『教育学論集』第3輯 小西重直
日本教育学会 新紀元社 1944
- ・広瀬淡窓における敬天説の成立『人文社会科学
研究報告』1 井上源吾 長崎大学学芸学部 1951
- ・広瀬淡窓に於ける内省と実践について『西日本史
学』11 井上源吾 西日本史学会 1952
- ・遠思楼詩鈔〔広瀬淡窓〕ー近世詩抄その1
『学苑』152 吉田澄夫 昭和女子大学近代文化研究
所 1953
- ・広瀬淡窓の思想についての諸説批判『人文社会科学
研究報告』3 井上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』3 井
上源吾 長崎大学学芸学部 1953
- ・広瀬淡窓の教育意見『人文社会科学研究報告』4 井
上源吾 長崎大学学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育思想、とくに訓育とその方法につ
いて『人文社会科学研究報告』4 井上源吾 長崎大学
学芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の教育管見、とくに教授の方法について
『人文社会科学研究報告』4 井上源吾 長崎大学学
芸学部 1954
- ・広瀬淡窓の経済思想『経済学論究』8-3 東晋太郎 関
西学院大学 1954
- ・広瀬淡窓の禍福応報論について『支那学研究』12
工藤豊彦 広島支那学会 1955
- ・広瀬淡窓の老荘学について『大分大学学芸学部研究
紀要』4 工藤豊彦 大分大学学芸学部 1955
- ・広瀬淡窓 析玄の研究『九州儒学思想の研究』工藤
豊彦 九州大学中国哲学研究室 1957
- ・日向と咸宜園『宮崎大学学芸学部研究時報』第1巻
第3号 黒江一郎 宮崎大学学芸学部 1957
- ・武谷祐之著「南柯一夢」『九州文化史研究所紀要』
10 井上忠 九州大学付属図書館付設記録資料館九州
文化史資料部門 1963
- ・「迂言」小考ーその学制を中心として『弘前大学人
文社会』第28号 教育・心理学篇 前野喜代治 弘前大
学人文社会学会 1963
- ・広瀬淡窓の教育精神『芸文』第4巻第1号 大久保勇
市 近畿大学文科学会 1963
- ・秋風庵月化と五馬紀行について『大分県地方史』
42号 高倉芳男 大分県地方史研究会 1966
- ・広瀬淡窓の詩論『和歌山大学教育学部紀要 人文科
学』17 松下忠 和歌山大学教育学部 1967
- ・咸宜園覚書ー九州紀行より『斯文』47 新田大作 欺
文会 1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-1-
『芸文』第7巻2号 大久保勇市 近畿大学文科学会
1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-2-
『芸文』第8巻1号 大久保勇市 近畿大学文科学会
1967
- ・広瀬淡窓の老子観（人間性研究の一環として）-3-
『芸文』第8巻2号 大久保勇市 近畿大学文科学会
1968
- ・広瀬淡窓と高野長英『教育学雑誌』2号 松月秀雄
日本大学教育学会 1968
- ・萬善簿 広瀬淡窓先生の修練ぶり『先覚と共に』第1
集 青木繁 農林叢書刊行会 1968
- ・淡窓・長英をかばう『日田文化』第11号 中島市三
郎 日田市教育委員会 1968
- ・広瀬淡窓門下萍華上人の話『日田文化』第12号 古
川克己 日田市教育委員会 1969
- ・塩谷大四郎正義公の生誕二百年を迎えて『日田文
化』第12号 中島市三郎 日田市教育委員会 1969

- ・広瀬淡窓の易理観－人間性研究の一環として〔付「義府（放言）」（天保12年稿）翻刻〕『近畿大学教養部研究紀要』1号 大久保勇市 近畿大学教養部 1969
- ・小倉落城〔慶応2年〕と日田・咸宜園－「林外日記」を中心として『九州大学教育学部紀要 教育学部門』15 井上義巳 九州大学教育学部 1969
- ・広瀬淡窓の思想と教育『日本歴史』第264号 青野春水 吉川弘文館 1970
- ・咸宜園をめぐる政治情勢－咸宜園と日田代官府との関係（近世日田とその周辺地域の総合的研究）『九州文化史研究所紀要』15 井上義巳 九州大学付属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門 1970
- ・咸宜園最後の講師勝屋明浜先生『大分県地方史』第56号 高倉芳男 大分県地方史研究会 1970
- ・広瀬淡窓と咸宜園 歴史残花』第4 広瀬正雄他 時事通信社 1971
- ・豊後日田の広瀬家史料の調査によせて（研究余録）『日本歴史』第272号 杉本勲 吉川弘文館 1971
- ・咸宜園の財政－塾主の会計記録より見た『日本歴史』第276号 井上義巳 吉川弘文館 1971
- ・幕末経済論の一研究－経世家としての広瀬淡窓『三田学会雑誌』64巻8号 島崎隆夫 慶応義塾大学経済学会 1971
- ・咸宜園と洋学『史淵』第105・106合輯 杉本勲 九州大学大学院人文科学研究院 1971
- ・淡窓〔村垣淡路守範正〕の「米利堅（メリケン）」見聞記『日本及日本人』1520号 栗原隆一 J&Jコーポレーション 1973
- ・広瀬淡窓の儒林評とその道統『近畿大学教養部研究紀要』4巻3号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
- ・万善簿のねらい〔広瀬淡窓〕『近畿大学教養部研究紀要』5巻2号 大久保勇市 近畿大学教養部 1973
- ・咸宜園入門者についての研究（青山学院創立100周年記念論文集）『青山学院大学文学部紀要』16号 井上義巳 青山学院大学文学部 1974
- ・適材適育－広瀬淡窓とその教育思想『日本及日本人』1548号 松井康秀 J&Jコーポレーション 1978
- ・広瀬淡窓について『東洋研究』49号（講演）広瀬正雄 大東文化大学東洋研究所 1978
- ・小石元瑞と広瀬淡窓の書簡『混沌』第5号 平野翠 中尾松泉堂書店 1978
- ・近世教育思想研究-3-広瀬淡窓の教育思想『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』5巻4号 鹿毛基生 大分大学教育学部 1979
- ・幕末私塾の学規の研究－咸宜園を中心として『教育研究』23 関山邦宏 青山学院大学教育学会 1979
- ・広瀬淡窓（現代日本教育の源流〈特集〉）（江戸時代の教育家たち）『教育と医学』29巻1号 高野澄 慶応義塾大学出版会 1981
- ・近世私塾の就学形態－淡窓日録の分析を中心に『人文』27 海原徹 京都大学教養部 1981
- ・広瀬淡窓の敬天説とその教育方法理論『IBU四天王 寺国際仏教大学文学部紀要』14号 井内嘉美 四天王寺国際仏教大学 1981
- ・日高耳水一族と秋月橋門『宮崎県地方史研究紀要』第7輯 石川正雄 宮崎県立図書館 1981
- ・『日本人の道德思想』〔内容〕：福沢以前の「天」の思想について（広瀬淡窓）壺井秀生 文化総合出版 1981
- ・広瀬淡窓の不安－その自己と超越的なもの『季刊日本思想史』19号 高橋文博 ぺりかん社 1983
- ・『約言』の思想について『季刊日本思想史』19号 工藤豊彦 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の教育思想『季刊日本思想史』19号 関山邦宏 ぺりかん社 1983
- ・教育理念としての「敬天」－『約言』『約言或問』をめぐって『季刊日本思想史』19号 田中加代 ぺりかん社 1983
- ・天命と人情－広瀬淡窓の敬天論をめぐって『季刊日本思想史』19号 藤本雅彦 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の教育観－「教育」の語を中心に『季刊日本思想史』19号 藤原敬子 ぺりかん社 1983
- ・『万善簿』と『陰陽録』『季刊日本思想史』19号 古川哲史 ぺりかん社 1983
- ・広瀬淡窓の倫理思想『倫理学紀要』1輯 黒住真 東京大学文学部 1984
- ・広瀬淡窓の生涯とその時代区分『日本女子大学紀要 文学部』34 田中加代 日本女子大学 1984
- ・近世塾の近代化過程の研究－咸宜園と慶応義塾を例として -前- 近世塾の諸問題『論叢』（玉川大学文学部紀要）25 多田建次 玉川大学 1984
- ・近世塾の近代化過程の研究－咸宜園と慶応義塾を例として -後- 家塾から義塾へ『論叢』（玉川大学文学部紀要）26 多田建次 玉川大学 1985
- ・広瀬淡窓研究史試論『国学院雑誌』第86巻第5号 三澤勝己 国学院大学総合企画部 1985
- ・広瀬淡窓著「読論語」の諸本について『史学研究集録』（10）三澤勝己 国学院大学日本史学専攻大学院会 1985
- ・広瀬淡窓の社会思想－『迂言』を中心に－『邂逅』3号 山崎謹哉 岡山大学倫理学会 1985
- ・近世広島における私塾教育の研究－咸宜園の系譜－（1）『芸備地方史研究』150・151号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985
- ・近世広島における私塾教育の研究－咸宜園の系譜－（2）『芸備地方史研究』152号 鈴木理恵 芸備地方史研究会 1985
- ・広瀬淡窓の府内紀行『大分県地方史』第120号 甲斐素純 大分県地方史研究会 1985
- ・咸宜園の教育（伝統を活かした学校教育）『学校教育研究所年報』29 鹿毛基生 学校教育研究所 1985
- ・日本教師論-6-広瀬淡窓とその師道論『東北福祉大学紀要』10 小野禎一 東北福祉大学 1985
- ・日本教師論-7-広瀬淡窓とその師道観『東北福祉大学紀要』11 小野禎一 東北福祉大学 1986

- ・広瀬淡窓「読大学」について『東洋文化』復刊第56号 三澤勝己 無窮会 1986
- ・広瀬淡窓の学統と「読論語」『国史学』129 三澤勝己 国史学会 1986
- ・広瀬淡窓と九州の儒者 緒論—同時代の交流について—『大倉山論集』21 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
- ・広瀬旭荘「日間瑣事備忘録」考—諸儒との交遊を中心として—1-『大倉山論集』22 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1987
- ・広瀬淡窓の学問と思想について『天領日田』第7号 深町浩一郎 天領日田を見直す会 1987
- ・日本教師論-8-広瀬淡窓とその師道観『東北福祉大学紀要』12 小野禎一 東北福祉大学 1987
- ・亀井昭陽の教育思想における「運命観」および「天命観」について『日本女子大学紀要』38 田中加代 日本女子大学 1988
- ・広瀬淡窓・旭荘の漢詩指導例—松永顕徳甫著「草稿」について—『近世文芸』49 市場直次郎 日本近世文学会 1988
- ・「広瀬淡窓」井上義巳『國學院雑誌』89巻8号 三澤勝己 國學院大學総合企画部 1988
- ・晨霜如雪—広瀬淡窓「休道」詩の成立について—『皇学館論叢』21巻1号 鬼頭有一 皇学館大学人文学会 1988
- ・広瀬淡窓「万善簿」について『亜細亜大学教養部紀要』37 栗田充治 亜細亜大学教養部 1988
- ・日本教育史学の確立過程下における広瀬淡窓関係記事—明治期、師範学校用教育史教科書を中心に—『人間研究』26 天野晴子 日本女子大学教育学科の会 1990
- ・日本教育史学の確立過程下における広瀬淡窓関係記事—明治期、師範学校用教育史教科書を中心に—『人間研究』26 天野晴子 日本女子大学教育学科の会 1990
- ・遠山荷塘と広瀬淡窓『明治大学教養論集』232 徳田武 明治大学教養論集刊行会 1990
- ・広瀬淡窓私新抄-1-『帝塚山大学教養学部紀要』35 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
- ・広瀬淡窓私新抄(2)『帝塚山大学教養学部紀要』36 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1993
- ・広瀬淡窓私新抄(3)『帝塚山大学教養学部紀要』38 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
- ・広瀬淡窓私新抄(4)『帝塚山大学教養学部紀要』39 木南卓一 帝塚山大学教養学部 1994
- ・広瀬淡窓と「徒然草」『大倉山論集』第36輯 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1994
- ・咸宜園—広瀬淡窓の私塾教育が今日に与える意味—『家庭科学』61巻3号《特集》21世紀の教育制度を考える-1- 田中加代 日本女子社会教育会家庭科学研究所 1994
- ・新井白石と広瀬淡窓『季刊日本思想史』46《特集》新井白石 三澤勝己 日本思想史懇話会 ぺりかん社 1995
- ・山陽手批淡窓詩稿『日田文化』第38号 田中晃 日田市教育委員会 1995
- ・広瀬淡窓の自然観について『中国哲学論集』21 杜栄 九州大学中国哲学研究会 1995
- ・寛政の教化政策と地方儒学『東洋研究』121 西江錦史郎 大東文化大学東洋研究所 1996
- ・広瀬淡窓と袁枚『学林』28・29 肥田明啓 中国芸文研究会 1998
- ・淡窓詩話の文章(特集 中世・近世)『解釈』44巻3号 大木正義 解釈学会 1998
- ・田中加代著「広瀬淡窓の研究」『大倉山論集』44 三澤勝己 大倉精神文化研究所 1999
- ・広瀬淡窓の詩論とその源流—清代前期の詩論の受容を中心として—『学林』30 肥田明啓 中国芸文研究所 1999
- ・咸宜園における漢詩講釈の展開『教育学研究紀要』45巻1号 山本佐貴 中国四国教育学会 1999
- ・私塾 本立書院(東宜園)(特集 明治十年代の江戸)『江戸文学』21 宮崎修多 ぺりかん社 1999
- ・江戸時代の学習機会-その2-『九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』4 Nazario Bustos 九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター 1999
- ・「松下筑陰伝攷(上)」『語文研究』86・87号 高橋昌彦 九州大学国語国文学会 1999
- ・咸宜園門人たちの詩社「玉川吟社」に関する考察『大分県地方史』179号 山本佐貴 大分県地方史研究会 2000
- ・広瀬淡窓と老子思想『中国哲学論集』26 杜栄 九州大学中国哲学研究会 2000
- ・廣瀬淡窓の詩論と咸宜園教育との関連『立命館文学』563号 肥田明啓 立命館大学人文学会 2000
- ・女流漢詩人を探す『機』No109 高橋昌彦 藤原書店 2000
- ・広瀬淡窓の経世論小考『日本経済思想史研究』(1) 三澤勝己 日本経済思想史研究会 2001
- ・近世末期芸州の漢学塾を介した書籍貸借—塾生を中心に—『長崎大学教育学部社会科学論叢』63号 鈴木理恵 長崎大学教育学部 2003
- ・日本の経済発展と学校教育(1)『鹿児島大学教育学部教育実践センター研究紀要論文』13 神田嘉延 鹿児島大学教育学部 2003
- ・広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1—江戸詩壇史における位置づけ(1)『茨城大学教育学部紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
- ・広瀬淡窓(1782-1856)による漢詩教育のあり方1—江戸詩壇史における位置づけ(2)『茨城大学教育学部紀要』53号 向野康江 茨城大学教育学部 2004
- ・日本漢詩人紀行(1)淡窓の筑遊『創文』469号 林田愼之助 創文社 2004

- ・丹波における明治維新前後 広瀬淡窓の思想『丹波』6号《特集》幕末維新を馳せた丹波の人々 奥村覚丹波史談会 2004
- ・咸宜園の漢籍収集と塾生の閲覧『漢籍』12号 三澤勝己 漢籍研究会 2004
- ・広瀬淡窓「歳暮」による授業実践報告『漢文教育』30 尾本優輝 広島漢文教育研究会 中国中世文学会 2005
- ・漢文教材としての広瀬淡窓－『桂林莊雜詠示諸生』教材化の背景－『二松学舎大学人文論叢』75号 小金澤豊 二松学舎大学人文学会 2005
- ・近世都市における「知」の空間と場－豊後国日田咸宜園を中心に－『年報都市史研究』13号 岩本馨 山川出版社 2005
- ・淡窓漢文日記・懷舊桜筆記にみる 天保の大飢饉『日田文化』第47号 野田高巳 日田市教育委員会 2005
- ・広瀬淡窓の「教育ノ術」礼楽刑政による解釈〔含論評〕『日本教育史研究』25号 齋藤尚志 日本教育史研究会 2006
- ・廣瀬淡窓と陶淵明『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』林田愼之助 松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集刊行會 2006
- ・咸宜園と白鹿洞書院－日中私塾の比較研究－『國學院大学大学院紀要』39号 朱 玲莉 國學院大学大学院 2008
- ・広瀬淡窓、李白への挑戦「月下独酌」論『文学』10巻3号 小財陽平 岩波書店 2009
- ・「幕末明治期の咸宜園と真宗僧」『淡窓研究会会報』川邊雄大 淡窓研究会 2009
- ・日向薬事始め(その5)日向出身の緒方洪庵・適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々『九州保健福祉大学研究紀要』10号 山本郁男・井本真澄・宇佐見則行ほか 九州保健福祉大学研究紀要委員会 九州保健福祉大学 2009
- ・広瀬淡窓における学校と社会『日本文化論叢』17号 前田勉 愛知教育大学日本文化研究室 2009
- ・休道詩鑑賞への一考『敬天』第37号 岩沢光夫 淡窓会 2009
- ・「近世文芸研究と評論」75号[内容]: 広瀬淡窓と頼山陽 文化五年の交流を通して 黒川桃子 近世文芸研究と評論の会 早稲田大学文学部 2009
- ・広瀬淡窓の教育『杵築史談会』藤井準一郎 久米忠臣 杵築史談会 2009
- ・廣瀬淡窓の詩風について－その日本化の一側面を中心に－『アジア文化交流研究』第5号別冊《特集》幕末明治期における日本文学・歴史・思想・藝術の諸相 朱 秋而 関西大学アジア文化交流研究センター 2010
- ・広瀬淡窓と陸游詩－淡窓詩の源流－『江戸風雅』第2号 黒川桃子 江戸風雅の会 2010
- ・広瀬旭荘の足利学校行『江戸風雅』第3号 徳田武江 江戸風雅の会 2010
- ・苔を二広の墓碑と合原松子の墓とに掃ふ『江戸風雅』第3号 池澤一郎 江戸風雅の会 2010
- ・広瀬旭荘と『水滸伝』『江戸風雅』第3号 徳田武・土屋和之 江戸風雅の会 2010

Ⅲ. 世界文化遺産登録推進の取組み

(1) 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なもの。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあり、人類の残酷な歴史を刻むものや戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれている。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものである。

○世界遺産の種類

世界遺産には次の3種類があり、有形の不動産が対象となっている。

世界遺産

文化遺産：顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など

自然遺産：顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、景観、絶滅のおそれのある動植物の生息・生息地などを含む地域

複合遺産：文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えている遺産

(2) 事業の概要

日田市では平成22年度に世界遺産推進室を開設し、茨城県水戸市の弘道館及び偕楽園、栃木県足利市の足利学校、岡山県備前市の閑谷学校と連携し、「近世の学問・教育遺産」という主題で咸宜園の世界文化遺産登録を目指して取組んでいる。

世界文化遺産として登録されるには、ユネスコが定めた基準である「顕著で普遍的な価値」というものを証明する必要がある。そこで、『近世の学問・教育遺産』が持つ「顕著で普遍的な価値」を証明するために、世界遺産推進室では日田市世界遺産登録検討委員会の指導のもと、咸宜園に関する学術的な調査研究を、咸宜園教育研究センターと両輪となって作業を進めている。また、この取組みは行政のみで進められるものではなく、市民の機運の醸成と協力が必要となってくる。市民と行政とが一体となって取組むことが重要となることから、調査研究の結果を公表しその情報を共有することが普及啓発につながり、一人でも多くの市民の協力を得ることができるよう取組まなければならない。

○調査研究

- ①真実性と完全性の証明
- ②類似資産との比較研究

○普及啓発

①世界遺産登録推進講演会

【第1回】世界遺産をめぐる現状と課題や、教育資産で世界遺産登録を目指す取組みの意義などについてご講演いただいた。

日 時：平成22年7月2日（金）19：00開演

会 場：パトリア日田 小ホール

講 師：筑波大学大学院教授 日高健一郎氏

演 題：「世界遺産の現在と未来：学問・教育遺産の可能性」

参加者：146人



第1回 世界遺産登録推進講演会

【第2回】咸宜園教育や咸宜園と豆田の関係性についてご講演いただいた。

日 時：平成23年2月28日（日）19：00開演

会 場：パトリア日田 小ホール

講 師：別府大学名誉教授 後藤宗俊氏

演 題：「地域文化の継承と世界遺産－咸宜園での活動によせて－」

参加者：117人

②市民協働の取組み

（咸宜園平成門下生之会の活動）

世界遺産登録を目指す取組みは、市民と行政とが一体となって取組むことが重要となることから、市民による応援団体を発足し、この取組みを市民として支援する。

「咸宜園平成門下生之会」

発足日：平成22年12月23日

会員数：120名

(3) 経 過

日 程	内 容
4月 1日	日田市世界遺産推進室開設
4月22日	水戸市職員が日田市を訪問し、大分県庁を訪ね協力を要請
5月13日	日田市職員が水戸市と足利市を訪問
5月25日	第1回日田市世界遺産登録検討委員会開催
7月 2日	第1回世界遺産登録推進講演会開催
7月 5日	佐藤日田市長が水戸市・足利市を表敬訪問
7月30日	日田市、水戸市による合同学術会議開催（会場：水戸市）
7月31日	日田市世界遺産登録検討委員、教育長が足利学校を訪問
10月 2日	水戸市、足利市、備前市関係者が咸宜園教育研究センター開館式典に出席
11月17日	合同学術会議、事務連絡会議開催（会場：東京、事務局：水戸市）
2月 9日	第2回日田市世界遺産登録検討委員会開催
2月28日	第2回世界遺産登録推進講演会開催



弘道館 正庁（茨城県水戸市）



偕楽園の好文亭からの眺望（茨城県水戸市）



咸宜園 秋風庵



足利学校 方丈（栃木県足利市）



閑谷学校 講堂（岡山県備前市）

IV. 利用状況・日誌抄

(1) 利用状況（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

月	開館日数	センター		秋 風 庵		行事等参加者
		入室者	平均	入室者	平均	
4	0 (30)	—	—	1,147	38	
5	0 (31)	—	—	1,796	58	
6	0 (30)	—	—	764	25	
7	0 (31)	—	—	883	28	
8	0 (31)	—	—	1,223	39	220
9	0 (30)	—	—	861	29	
10	27 (31)	3,051	113	3,051	98	528
11	26 (30)	3,165	121	3,165	106	
12	23 (28)	805	35	805	29	51
1	25 (28)	708	28	708	25	
2	27 (28)	1,985	73	1,985	71	
3	31 (31)	2,056	66	2,056	66	
計	159 (359)	11,770	73	18,444	51	799

※開館日数のカッコ内数字は展示室の開館日数

(2) 日誌抄

2010. 4. 1	咸宜園教育研究センター・世界遺産推進室開設	長福寺本堂・アプロディール紙音・広瀬淡窓墓(長生園)・咸宜園跡
5. 25	第1回日田市世界遺産登録検討委員会の開催 市役所別館2階	11. 13 皇太子殿下御来園 咸宜園跡 秋風庵・遠思楼のライトアップ (～11/14) 咸宜園跡
7. 2	第1回世界遺産登録推進講演会を開催 パトリア日田	11. 14 演奏会と「お茶会」咸宜園跡 17 合同学術会議・事務連絡会議を開催 東京
7. 30	日田市、水戸市による合同学術会議を開催 水戸市	12. 3 常設展「平成22年度咸宜園教育研究センター収蔵品展」(～2/13)
8. 7	「淡窓先生に学ぶ～咸宜小学校の取り組み」(～8/23) パトリア日田ギャラリー	12. 23 咸宜園平成門下生(仮称)市民応援団 発足式(後に正式名称として、「咸宜園平成門下生之会」に決まる)
8. 19	第10回「立志の道を歩こう」門下生・清浦奎吾の顕彰事業 咸宜園跡	2010. 2. 9 第2回日田市世界遺産登録検討委員会 を開催 パトリア日田
9. 13	平成22年度第1回咸宜園教育研究センター運営委員会の開催 咸宜園教育研究センター研修室	2. 10 平成22年度第2回咸宜園教育研究センター運営委員会の開催 パトリア日田
9. 30	「淡窓先生に学ぶ～咸宜小学校・桂林小学校の取り組み」(～11/7) パトリア日田ギャラリー	平成22年度第1回咸宜園教育研究センター専門委員会の開催 パトリア日田
10. 2	咸宜園教育研究センター開館 市制70周年記念事業 講演会「咸宜園教育に何を学ぶか」京都大学名誉教授海原徹 パトリア日田小ホール	2. 15 企画展「咸宜園とその門下生一漢詩人廣瀬旭莊一」(～3/31)
10. 3	開館記念特別展「廣瀬淡窓と咸宜園」(～11/30)	2. 28 第2回世界遺産登録推進講演会を開催 パトリア日田
10. 31	「咸宜園門下生子孫の集い」(～11/1)	

V. 各種委員会委員・職員名簿

(1) 咸宜園教育研究センター運営委員会名簿

任 期：平成22年6月1日から2年間

選出資格	氏 名	所 属
学識経験者	海 原 徹	京都大学名誉教授
	大 神 信 證	日田市文化財保護審議会副会長
	梶 原 浩	日田市公民館館長会会長
	後 藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	佐 藤 誠一郎	淡窓会代表
	武 内 眞 司	社団法人日田市観光協会理事
	廣 瀬 貞 雄	財団法人廣瀬資料館理事長
	三 宅 多加子	日田書道協会
	合 原 多賀雄	日田市教育委員会教育長

(50音順)

(2) 咸宜園教育研究センター専門委員会名簿

任 期：平成22年6月1日から2年間

選出資格	氏 名	所 属
学識経験者	岩 沢 光 夫	淡窓会顧問、元日田市文化財保護審議会副会長
	海 原 徹	京都大学名誉教授
	後 藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	高 橋 昌 彦	福岡大学人文学部准教授
	豊 田 寛 三	別府大学学長
	中 島 三 夫	日田市文化財保護員
	平 井 義 人	大分県立先哲史料館館長
	深 町 浩一郎	大分県立歴史博物館館長

(50音順)

(3) 日田市世界遺産登録検討委員会名簿

任 期：平成22年5月25日から2年間

選出資格	氏 名	所 属
学識経験者	海 原 徹	京都大学名誉教授
	江 面 嗣 人	岡山理科大学教授
	後 藤 宗 俊	別府大学名誉教授
	豊 田 寛 三	別府大学学長
	宮 本 雅 明	九州大学名誉教授(9月23日逝去)

(50音順)

(4) 職員名簿

咸宜園教育研究センター

職 名	氏 名
名 誉 館 長	後 藤 宗 俊

(平成22年9月1日～平成23年3月31日現在)

職 名	氏 名
所 長	財 津 隆 之
係 長	佐 藤 野 里 子
主 査	吉 田 博 嗣

(平成22年4月1日～9月30日まで)

職 名	氏 名
所 長	高 瀬 享
係 長	佐 藤 野 里 子
主 査	吉 田 博 嗣
主 査	古 城 智 浩

(平成22年10月1日～平成23年3月31日現在)

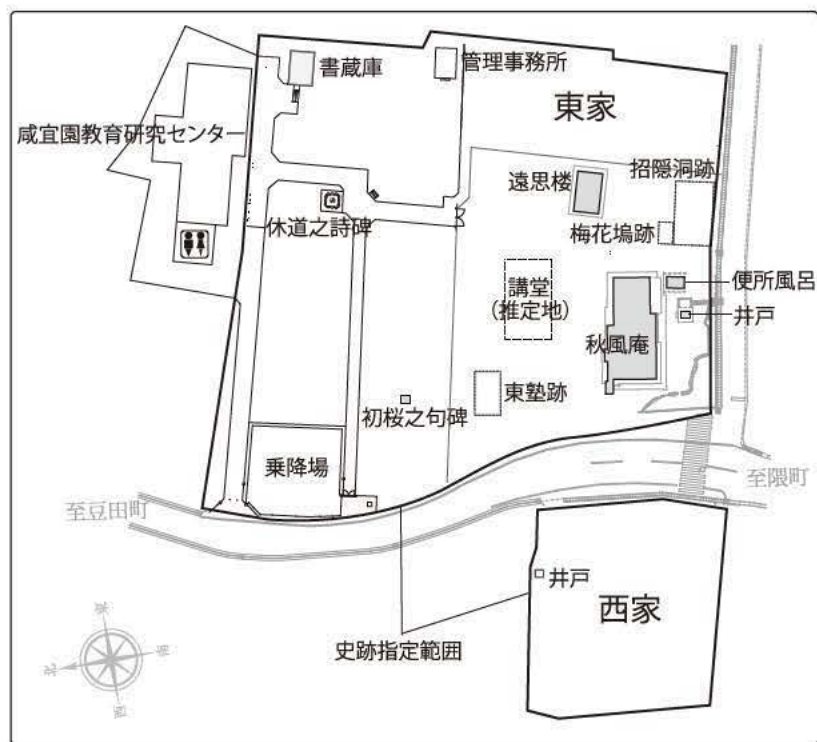
世界遺産推進室

職 名	氏 名
室 長	高 瀬 享
主 査	吉 田 博 嗣
主 査	古 城 智 浩
主 査	行 時 桂 子
主 事	原 田 弘 徳
主 事 補	廣 末 雅 代

(平成23年3月31日現在)

I. 沿革

- | | | | | | |
|-------------|----|-----------------------------|--------------|----|---|
| 明治30年(1897) | 9 | 咸宜園閉塾 | 平成17年(2005) | | 史跡咸宜園跡保存整備実施設計を行う
淡窓先生百五十年祭(150回忌)開催 |
| 大正 2年(1913) | | 淡窓先生頌徳祭
(生誕130年祭)開催 | 平成19年(2007) | 11 | 史跡咸宜園ガイダンス棟実施設計
史跡のガイダンス施設として実施設計を行う |
| 大正 5年(1916) | | 淡窓図書館が建てられる | 平成20年(2008)～ | | 咸宜園教育研究センター建設工事 |
| 大正 8年(1919) | | 休道の詩碑建立 | 21年(2009) | | (国土交通省所管のまちづくり交付金事業を導入) |
| 昭和 7年(1932) | 7 | 「咸宜園跡」が国史跡に指定される | 平成21年(2009) | 9 | 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 昭和23年(1948) | | 「広瀬淡窓墓」が国史跡に指定される | 平成22年(2010) | 1 | 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 昭和30年(1955) | 11 | 淡窓百年祭(100回忌)の開催 | | 3 | 咸宜園教育研究センター運営検討会議開催 |
| 平成 2年(1990) | 3 | 『第3次日田市総合計画』で咸宜園跡の保存整備を計画 | | 10 | 咸宜園教育研究センター開館記念式典、記念事業(記念講演会・座談会) |
| 平成 4年(1992) | 2 | 史跡咸宜園跡保存整備構想検討委員会(～平成4年度) | | | 「咸宜園門下生子孫の集い」
(日田市制70周年記念事業) |
| 平成 5年(1993) | 3 | 史跡咸宜園跡保存整備基本構想の答申 | | 12 | 咸宜園平成門下生之会発足 |
| 平成 6年(1994) | 1 | 秋風庵等保存修理事業(～平成8年) | | | |
| 平成 7年(1995) | 3 | 史跡咸宜園跡内秋風庵等保存修理委員会(～平成12年度) | | | |
| 平成 9年(1997) | 1 | 遠思楼復原修理事業(～平成12年度) | | | |
| 平成15年(2003) | | 史跡咸宜園跡保存整備委員会(～現在に至る) | | | |



咸宜園教育研究センター位置図

Ⅱ. 施設の概要・組織

(1) 設置目的

咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与する。

(2) 設置年月日

平成22年4月1日
(平成22年10月2日開館)

(3) 設置場所

日田市淡窓2丁目2番18号

(4) 施設の概要

公開展示室・研修室・研究室を備えた「史跡咸宜園跡」のガイダンス施設。正式名称は「咸宜園教育研究センター」(「世界遺産推進室」併設)

①構造・規模 木造平屋造 建物延べ面積
約373㎡(専有面積)

②開館時間 9:00~17:00

③休館日 水曜日
(水曜日が国民の祝日または振替休日にあたるときはその翌日)
年末年始(12月29日~1月3日)

④主要な施設

◇公開展示室(約108㎡)
常設展示(年4回展示入替)
企画展示(年2回)

◇研修室(約73㎡)
咸宜園入門ばっくすの体験や各種研修に利用

◇研究室(約61㎡)

図書コーナーやパソコン閲覧コーナーを設け、廣瀬淡窓や咸宜園のことなどについて、自由に調べることが可能。ただし、図書の貸し出しは行わない。

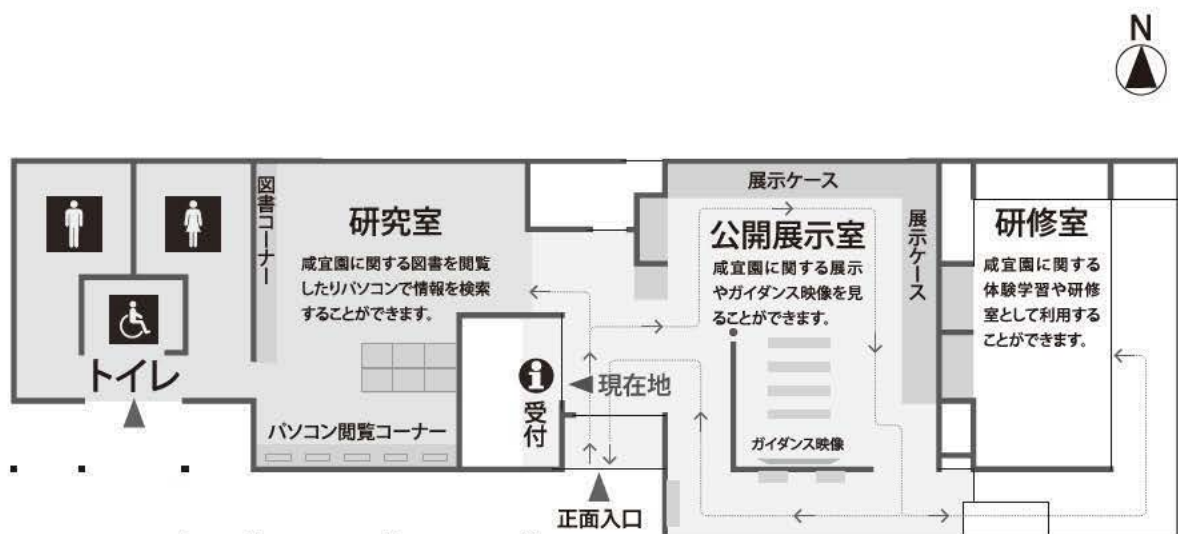
◇収蔵庫(約44㎡)

(5) 主な業務

- ①咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究並びに関係資料の調査、収集、整理及び保管
- ②上記①の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- ③咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- ④史跡咸宜園跡の公開

(6) 組織

- ①咸宜園教育研究センター
名誉館長(非常勤)
所長——係長 1
 主査 2
 臨時職員 3
(内、学芸員資格者1)
- ②世界遺産推進室
室長——主査 3
 主事 1
 主事補 1
(内、学芸員資格者4)



咸宜園教育研究センター平面図

Ⅲ. 利 用 案 内

(1) 開 館 時 間

■公開展示室：9：00～17：00

■研 修 室：9：00～17：00

■研 究 室：9：00～17：00

(入館時間については、9：00～16：30)

■休館日：水曜日（水曜日が国民の祝日または振替
休日にあたるときはその翌日）
年末年始（12月29日～1月3日）

(2) 交 通

■JR久大本線：「日田駅」下車徒歩約10分

■高速バス：「市役所前」下車徒歩約7分

■車：大分自動車道「日田IC」から約5分
(専用駐車場には10台駐車可能)



成宜園入門ボックスの紹介



等級	体験内容	体験のねらい
一級下	声に出して読む 「淡窓先生のことば」	お手本の音声をまねて朗読や時吟をおこない、廣瀬淡窓先生のつくった「いろは歌」や漢詩に親しみます。
一級上	かるた 「成宜園 いろは歌」	廣瀬淡窓先生のつくった「いろは歌」のかるたで遊びながら、成宜園で教えていたことを学びます。
二級下	紙芝居 「淡窓先生ものがたり」	廣瀬淡窓先生を主人公にした紙芝居を読むことにより、先生がどのような人で、何をおこなったかを知ることができます。
二級上	紙芝居 「成宜園入門ものがたり」	成宜園の門下生を主人公にした紙芝居を読むことにより、成宜園がどのような学校だったかを知ることができます。
三級下	すごろく 「淡窓先生の一生」	すごろくで遊びながら廣瀬淡窓先生の一生のできごとや、成宜園の歴史について学ぶことができます。
三級上	すごろく 「成宜園入門 ～月旦評を学ぼう～」	すごろくで遊びながら、「月旦評」のしくみなど、成宜園についてくわしく学ぶことができます。
四級下	継手のパズル 成宜園の建物にふれよう	成宜園の建物にある「継手」の模型を、分解したり組み立てることにより、成宜園の建物に親しみます。
四級上	江戸時代の国名パズル 門下生はどこからきたの？	成宜園に全国からたくさんの門下生が入門しました。その門下生の数や、江戸時代の国名をパズルを使って学びます。
五級下	はんこをつくろう 淡窓先生の落款	廣瀬淡窓先生の落款（はんこ）を押してみることができます。また、自分の名前のはんこをつくってみることで、漢字に親しみます。

等級	体験内容	体験のねらい
五級上	漢詩紙芝居 「淡窓先生が詠んだ風景」	日田市内の風景写真を見ながら、廣瀬淡窓先生の漢詩を読み合い、作品を鑑賞します。
六級下	日田の古地図 成宜園をさがせ！	江戸時代の日田の様子がわかる古地図から、成宜園やさまざまな施設を探して、日田の歴史を学びます。
六級上	掛屋の仕事を体験しよう	廣瀬淡窓先生の家は掛屋でした。掛屋の仕事である両替を体験しながら、江戸時代のお金や、ものの価値を学びます。
七級下	和綴じの本をつくろう	「和綴じ」という昔の本をつくる方法で手帳をつくり、日本の伝統的な文化にふれます。
七級上	和紙のはがきをつくろう	楮から和紙のはがきをつくることで日本の紙の文化にふれ、日田の昔の産業について学びます。
八級下	漢詩パズル 淡窓先生の漢詩にふれよう	廣瀬淡窓先生の漢詩を使ったパズルを解くことにより、漢詩がどのように構成されているかを学びます。
八級上	漢詩のしくみ 淡窓先生の漢詩に学ぼう	廣瀬淡窓先生の漢詩をなぞって書いたり、クイズを解くことにより、漢詩の規則について学びます。
九級下	万善簿をつけてみよう	廣瀬淡窓先生がつけていた万善簿をまねてつけてみることで、先生の考え方にふれ、また万善簿の意味を学びます。
九級上	日記を書こう 淡窓先生の日	廣瀬淡窓先生の日記を通して、先生の生活や人がらにふれます。また、日記を書いてみることで、日記の面白さを体験します。

IV. 条 例・規 則

1. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例

平成22年3月24日

条例第9号

(設置)

第1条 咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究及び関係資料の収集、公開等を行うことにより、その理解を深め、宜風の浸透を図ることをもって、教育、学術や文化の向上に寄与することを目的として咸宜園教育研究センター(以下「センター」という。)を設置する。

(名称及び位置)

第2条 センターの名称及び位置は、次のとおりとする。

名称 咸宜園教育研究センター

位置 日田市淡窓2丁目2番18号

(業務)

第3条 センターの業務は、次のとおりとする。

- (1) 咸宜園、廣瀬淡窓、門下生等に関する研究並びに関係資料の調査、収集、整理及び保管
- (2) 前号の研究や調査成果の展示公開、情報発信等による活用
- (3) 咸宜園に関する体験学習、講座、講演会等による普及啓発
- (4) 史跡咸宜園跡の公開
- (5) 前各号に掲げるもののほか、センターの運営に関する事務のうち、教育委員会が必要と認める業務(開館時間及び休館日)

第4条 センターの開館時間は、午前9時から午後5時まで(入館時間については、午前9時から午後4時30分まで)とする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、開館時間を変更することができる。

2 センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

- (1) 水曜日(その日が国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日にあたる場合は、当該休日以後の直近の休日でない日)
- (2) 12月29日から翌年1月3日まで

(入館料)

第5条 センターの入館料は、無料とする。

(入館の制限)

第6条 教育委員会は、センターの入館者が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、入館を拒み、又は退館を命ずることができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他センターの管理上支障があるとき。

(原状回復義務又は損害賠償)

第7条 故意又は過失によりセンターの建物、設備、展示物等を損傷又は滅失した者は、直ちにこれを原状に復し、又はその損害を賠償しなければならない。ただし、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、損害賠償義務の全部又は一部を免除することができる。

(研修室の利用の許可)

第8条 研修室の利用(体験学習の利用を除く。以下同じ。)をしようとする者は、あらかじめ、教育委員会の許可を受けなければならない。許可を受けた事項を変更しようとするときも、同様とする。

2 教育委員会は、前項の許可をするに当たっては、管理上必要な条件を付することができる。

(利用許可の制限)

第9条 教育委員会は、その利用が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、研修室の利用の許可(以下「利用許可」という。)をしないことができる。

- (1) 公の秩序又は善良な風俗を害するおそれがあるとき。
- (2) 研修室の建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
- (3) その他研修室の管理上支障があるとき。

(利用許可の取消し等)

第10条 教育委員会は、利用許可を受けた者(以下「利用者」という。)が次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、利用許可を取り消し、又は研修室の利用を停止し、若しくは制限することができる。

- (1) 利用許可の条件に違反したとき。
- (2) 偽りその他不正な手段により利用許可を受けたことが明らかになったとき。
- (3) この条例又はこの条例に基づく教育委員会規則の規定に違反したとき。
- (4) その他研修室の管理上支障があるとき。

2 教育委員会は、前項の規定による利用許可の取消し等によって利用者が損害を受けても、その賠償の責めを負わないものとする。

(目的外利用又は権利譲渡の禁止)

第11条 利用者は、研修室を利用許可を受けた目的以外に利用し、又はその利用する権利を他の者に譲渡し、若しくは転貸してはならない。

(使用料)

第12条 利用者は、別表に定める額を使用料として前納しなければならない。ただし、教育委員会が特別の事情があると認めるときは、使用料を後納することができる。

(使用料の減免)

第13条 教育委員会は、前条の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当するときは、使用料を減額し、又は免除することができる。

- (1) 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。
- (2) 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第1条に規定する設置目的に沿って利用するとき。

(使用料の不還付)

第14条 既に納入された使用料は、還付しない。ただし、次の各号のいずれかに該当する事由に基づいて利用を中止したときは、既納の使用料の全部又は一部を還付することができる。

- (1) 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。
- (2) 利用者が自己の都合により2日前に利用許可の取消しを申し出たとき。
- (3) 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。

(咸宜園教育研究センター運営委員会の設置)

第15条 センターの適正かつ効果的な運営を図るため、咸宜園教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の所掌事務、組織その他必要な事項は、教育委員会規則で定める。

(委任)

第16条 この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

(施行期日)

1 この条例は、公布の日から起算して7月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。ただし、第15条及び次項の規定並びに附則第3項の改正は、平成22年4月1日から施行する。

(平成22年教委規則第11号で平成22年10月2日から施行)

(準備行為)

2 教育委員会は、施行の日前においても、この条例に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日田市特別職の職員で非常勤の者の報酬及び費用弁償に関する条例（昭和31年条例第167号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

別表（第12条関係）

区分	単位	金額	備 考
研修室	1時間につき	320円	1 常設電灯以外の電気を利用するときは、1回につき410円を定額に加算する。 2 冷暖房を利用するときは、1時間につき200円を加算する。

備考 1日の利用時間は、原則として3時間を限度とする。

2. 咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例施行規則

平成22年3月25日

教委規則第2号

(趣旨)

第1条 この規則は、咸宜園教育研究センターの設置及び管理に関する条例（平成22年条例第9号。以下「条例」という。）の施行に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用申請)

第2条 条例第8条第1項の許可を受けようとする者（以下「申請者」という。）は、咸宜園教育研究センター研修室利用許可申請書（様式第1号。以下「利用許可申請書」という。）を教育委員会に提出しなければならない。

(利用許可)

第3条 教育委員会は、研修室の利用の許可（以下「利用許可」という。）をしたときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可証（様式第2号。以下「利用許可証」という。）を申請者に交付するものとする。

(利用者の遵守事項)

第4条 利用許可を受けた者（以下「利用者」という。）は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 他人に危害を及ぼし、若しくは迷惑となる物品又は動物を持ち込まないこと。
- (2) 研修室内において、許可を受けずに物品の販売若しくは陳列をし、又は看板その他の広告物の掲示若しくは配布をしないこと。
- (3) 利用を終了したときは、研修室内を整理整頓すること。
- (4) その他職員の指示に従うこと。

(利用許可の変更等)

第5条 利用者は、利用許可の変更又は取消しを求めようとするときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消申請書（様式第3号）に利用許可証を添えて教育委員会に提出しなければならない。

2 教育委員会は、前項の利用許可の変更又は取消しを許可したときは、咸宜園教育研究センター研修室利用許可変更・取消許可証（様式第4号）を利用者

に交付するものとする。

- 3 利用者は、前項の規定による利用許可の変更の許可を受けた場合において、既納の使用料の額が変更後の使用料の額に対して不足額を生じるときは、直ちに、当該不足額を納付しなければならない。

(使用料の減免)

第6条 条例第13条の規定による使用料の減額又は免除(以下「使用料の減免」という。)ができる場合及び減免の率は、別表第1に定めるとおりとする。

(使用料の減免の申請)

第7条 使用料の減免を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料減免申請書(様式第5号)に利用許可申請書を添えて教育委員会に提出し、承認を受けなければならない。

(使用料の還付)

第8条 条例第14条ただし書の規定による既納の使用料の還付ができる場合及び還付の率は、別表第2に定めるとおりとする。

(使用料の還付の申請)

第9条 使用料の還付を受けようとする利用者は、咸宜園教育研究センター研修室使用料還付申請書(様式第6号)を教育委員会に提出し、承認を受けなければならない。

(損傷等の届出)

第10条 咸宜園教育研究センター(以下「センター」という。)の入館者は、センターの建物、設備、展示物等を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、咸宜園教育研究センター施設等損傷(汚損・滅失)届(様式第7号)を教育委員会に提出しなければならない。

(寄贈及び寄託)

第11条 センターは、咸宜園に関係する資料の寄贈及び寄託を受けることができる。

- 2 前項の資料の所有者は、センターに当該資料を寄贈し、又は寄託しようとするときは、資料名、数量等を明記した寄贈・寄託申込書(様式第8号)を教育委員会に提出しなければならない。
- 3 教育委員会は、前項の規定による資料の寄託を受けるものと決定したときは、預かり証(様式第9号。以下同じ。)を寄託者に交付し、受託控(様式第10号)をセンターに保管するものとする。
- 4 寄託期間は、原則として3年とする。ただし、教育委員会が特別な事情があると認めるときは、この期間を短縮することができる。なお、寄託の更新を妨げないものとする。
- 5 前項の期間の起算日は、寄託資料をセンターが受託した日が1月1日から6月30日までのときは1月1日、7月1日から12月31日までのときは7月1日とする。
- 6 寄託者は、寄託期間中に、特別の理由により寄託資料の一時返還を受けようとするときは、寄託資料一時返還申請書(様式第11号)を教育委員会に提出しなければならない。この場合において、寄託資

料の一時返還を受けようとする者が寄託者の代理人であるときは、その旨を証明する書類を添付しなければならない。

- 7 教育委員会は、前項の寄託資料の一時返還を承認したときは、寄託資料一時返還承認書(様式第12号)を寄託者に交付し、当該寄託資料を一時返還するものとする。
- 8 寄贈資料又は寄託資料の保管その他の取扱いについては、センターの所蔵する資料に準じて行うものとする。ただし、寄贈者又は寄託者と利用制限等に関して特約があるものについては、この限りでない。
- 9 資料の寄贈又は寄託に要する経費は、寄贈者又は寄託者の負担とする。ただし、特別の事情があるときは、この限りでない。
- 10 寄託資料が汚損し、損傷し、又は滅失したときは、教育委員会が補償するものとする。ただし、天災その他やむを得ない事由によるものであるときは、その賠償の責めを負わないものとする。
- 11 寄託資料の所有者が譲渡により変更が生じたときは、譲渡人は、速やかに預かり証に所有権の移転を証明する書類を添えて教育委員会に提出し、その旨の書き換えを受けなければならない。
- 12 寄託者は、預かり証を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、速やかにその事実を証明する書類又は当該預かり証を教育委員会に提出し、再交付を受けなければならない。

(資料の館外貸出し)

第12条 収蔵品等の資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、教育委員会が、博物館、図書館、学校等において学術上の調査研究又は教育普及の目的で使用され、かつ、取扱い上安全性が確保されると認めるときは、この限りでない。

- 2 前項の館外貸出しを受けようとする者(以下「貸出し申請者」という。)は、咸宜園資料貸出し許可申請書(様式第13号)を教育委員会に提出しなければならない。
- 3 教育委員会は、前項の館外貸出しを許可したときは、咸宜園資料貸出し許可書(様式第14号)を貸出し申請者に交付するものとする。

(撮影、複写等の許可)

- 第13条 収蔵品等の資料を学術上の調査研究等の目的で撮影し、若しくは複写し、出版物等への掲載をしようとする者又は模写、模造等をしようとする者(以下「撮影等申請者」という。)は、咸宜園資料撮影等許可申請書(様式第15号)を教育委員会に提出しなければならない。
- 2 教育委員会は、前項の規定による撮影等を許可したときは、咸宜園資料撮影等許可書(様式第16号)を撮影等申請者に交付するものとする。

(運営委員会の所掌事務)

第14条 条例第15条に規定する咸宜園教育研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)は、

教育委員会の諮問に応じ、条例第3条各号に掲げる業務に関する事項について審議し、及びこれらの事項について教育委員会に建議する。

- 2 運営委員会は、前項に定める事項のほか、センターの運営に関する事項について、教育委員会に意見を述べるができる。

(運営委員会の組織等)

第15条 運営委員会は、委員10名以内で組織する。

- 2 委員は、学識経験者等のうちから、教育委員会が委嘱する。
- 3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員が欠けた場合における補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 運営委員会に会長及び副会長を置き、委員の互選により定める。

- 5 会長は、会務を総理する。
- 6 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。
- 7 運営委員会の会議（以下「会議」という。）は、会長が招集し、会長がその議長となる。
- 8 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開き、議決をすることができない。
- 9 会議の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 10 運営委員会に、専門の事項について審議する必要があるときは、臨時委員を置くことができる。
- 11 臨時委員は、教育委員会が運営委員会の意見を聴いて委嘱する。

- 12 臨時委員は、専門の事項について審議し、運営委員会への報告が完了したときは、解職されるものとする。

- 13 運営委員会の庶務は、教育委員会において処理する。

(評価委員会)

第16条 センターに収蔵する咸宜園に関する資料の購入価格の適正な評価を行うため、咸宜園教育研究センター収蔵資料評価委員会（以下「評価委員会」という。）を置き、評価委員若干名で組織する。

- 2 評価委員は、教育委員会の諮問に応じ、センターが購入しようとする資料の評価を行い、その意見書を提出する。
- 3 評価委員は、学識経験者のうちから、教育委員会が委嘱する。
- 4 評価委員の任期は、1年以内とする。
- 5 評価委員は、職務上知り得た秘密のほか、自己が評価委員であることを他に漏らしてはならない。
- 6 購入しようとする資料について利害関係を有する評価委員は、当該資料の評価に加わることができない。
- 7 評価委員会の庶務は、教育委員会において処理する。

(委任)

第17条 この規則に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。

附 則

(施行期日)

- 1 この規則は、条例の施行の日から施行する。ただし、第11条から第16条まで及び次項の規定並びに附則第3項の改正は、平成22年4月1日から施行する。

(準備行為)

- 2 教育委員会は、施行の日前においても、この規則に規定する事務の実施について必要な準備行為をすることができる。

(日田市教育委員会事務委任規則の一部改正)

- 3 日田市教育委員会事務委任規則(昭和39年教委規則第10号)の一部を次のように改正する。

[次のよう] 略

別表第1（第6条関係）

減免ができる場合	減免の率	備 考
1 市及び市の執行機関が市の行政上のために利用するとき。	免 除	1号の免除は、使用料の減免の申請を省略することができる。
2 市長又は教育委員会が特に必要と認める者が第1条に規定する設置目的に沿って利用するとき。	免 除	

別表第2（第8条関係）

還付ができる場合	還付の率	備 考
1 研修室の管理上必要があるため、その利用許可を取り消したとき。	10割	還付金に10円未満の端数があるときは、これを切り捨てる。
2 利用者が自己の都合により10日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	7 割	
3 利用者が自己の都合により2日前に利用許可の取消しを申し出たとき。	5 割	
4 災害その他やむを得ない事情により利用することができなくなったとき。	10割	

様式（省略）

咸宜園教育研究センター
研究紀要 第一号

二〇一二年三月三〇日印刷発行

編集 日田市教育庁咸宜園教育研究センター

〒八七七―〇〇一二

大分県日田市淡窓二―二―一八

咸宜園教育研究センター

発行 日田市教育委員会

印刷・製本 尾花印刷有限会社

THE KANGIEN EDUCATION RESEARCH CENTER
B U L L E T I N

Vol. 1

The various aspects and related properties of Private Academy

Kangien and Town of Tenryo Hita

GOTO Munetoshi

Research Center Annual Report (Fiscal 2010)

Research Center Directory

March.2012